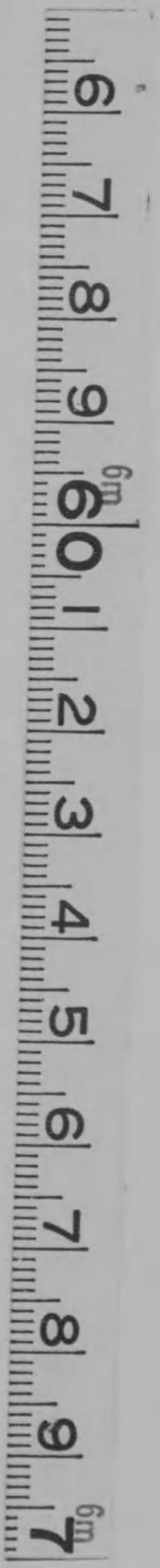


384

219

笑
記



始



384-219



記

法學博士	吉野作造
松本眞一	沖野岩三郎
著	跋

大正
9. 7. 6
内交



— 照 小 者 著 —



— 新聞配達から大學生 —

目次

序……………吉野作造
血笑記の後に……………沖野岩三郎

生ひ立ちの記

富士の山ふところ……………二
Vaterのロマンス……………三
政治運動が生んだ悲劇の發端……………八
小さな追憶……………一〇
たちばなの咲きにはふ國へ……………三

熊野灘	一五
僕の郷里——日高川上	一七
鶴ヶ城の四天王——松本彦太郎盛次	三三
家運の没落	二五
愁海棠	二九
妾宅の造營と枕木三十五萬丁事件	三七
涙の母子	四九
寺井先生の泣演説	五三
巢立ち	五八
鈴ちゃん	六三
田邊中學校の退校命令	六六
半身不隨	七四

落日の悲哀	七六
母の教訓	七七
脱走	八三

水 萍 行

虎ヶヶ峰	九二
旅は道伴れ	九九
十年振り	一〇七
波上の月	一一六
新聞配つて静岡中學に	一二三
畑中中尉殿	一二九
日記の中から	一三三

噬臍の悔……………一三七
 さすらひの旅へ……………一四三
 横濱輸出入商……………一五〇
 社會生活の第一試煉……………一五三
 無言の訣別……………一六二
 東京へ……………一六八

溶かされたる鐵塊 (中學時代)

自由堂新聞店……………一七二
 サイレンの歌……………一七七
 キヤム君の自殺……………一八〇
 錦城中學校へ……………一八五

雪中の深夜……………一八九
 大洪水中の奮闘……………一九五
 黙れッ 僕も男だ……………一九九
 高師運動會の中學選手競走……………二〇四
 牛乳屋さん……………二〇八
 潔き愛……………二二〇
 父のお蔭で……………二二五
 神田大火の災厄……………二三〇
 歸去來……………二三四
 感泣……………三三八
 桑の弓……………三三五
 第七高等學校へ……………三四〇

青春の曲 (高校生活)

宣誓式……………二四八

玉手箱……………二五三

城山と英雄氣……………二五四

愛弟謙治の死……………二五六

勇士の分捕品……………二五九

總代當選……………二六一

白銀の箭……………二六二

夏期休暇……………二六七

肋膜炎……………二七三

前車の轍……………二七九

病歸郷……………二八七

目次 (終)

捲土重來……………二八九

背水の陣……………二九二

七校教授評判記……………二九五

兄弟の牛乳配達……………二九七

good eye whole kagoshima……………三〇一

赤門へ……………三〇七

戸川氏と大池氏……………三二三

松本眞一君

あなたの新著に序文を書く約束をして、久しく之を果さずに居たのは、私の甚だ慚愧に堪へぬ所であります。忘れたのでも横着したのでもありませんが、全く先月來非常に忙しい事があつたので、思ひ乍ら遅れました。此上おかれてはあなたも書肆も大迷惑を爲さるでせうから、寸暇を偷んで擲り書きに一つ書いて見ます。

あなたは帝大法學部の學生で、私は教師の末席を汚して居ますから、世間並に申せば師弟の間柄ではありませんが、元々私はあなたを識つて居りません、あなたの御名前を始めて聞いたのは、一二ヶ月前、さる會合で沖野岩三郎君の口からです、自分の知つてゐる松本といふ君の方の學

生に、自叙傳とでもいふ様なものを書いて出版しやうと云ふ者がある出し抜けだが序文を書いてやつて呉れぬかと。沖野君の勸むるをば譯もなく、承知したと答へたのが、斯うした事になる端緒で、其後あなたにも御目に掛り、御著書をも大略拜見したのでありました。

私は、あなたの書かれた様な、斯う云ふ種類の本に序文を書くことになるとは、夢にも思つて居ませんでした。私は、元來他人の書いた本には序文などを書かぬ事にきめて居ます。著者は其著書について獨りで全責任を帯ふべきもの、他人の力を藉りて少しでも箔をつけ様とするのは、賞めた事ではないと考へてゐます。故に自分の著書には斷じて他人を煩さず、又他人の著書にも進んで責任を分擔する様な事は爲まいと深い決心をして居るのです、ですから随分今日まで色々な方から頼まれた事が

ありますが、皆御辭退して居ります。但し學生や友人やの著書で、若干何等かの形で、御手傳をしたものや、又夫れ程でなくとも、特に學問上の關係から推薦しても然るべきと思ふ場合には、例外として書かねばならぬ事もあらうとは考へてゐました。併し夫れも純粹に學問上特に私の専門に關係ある學問上のに限る積りでありましたから、今あなたの著書のやうな種類のものに、序文を書くといふ事は、全く思ひも掛けぬ事なのであります。

そんなら序文を書く事を引き受けた時、その本の内容性質を知らなかつたかと云ふに、さうではありません。沖野君は一通り之を説明して呉れました。分つて居ればさる種類の本なら私の柄にないからとて、御斷りする筈なのに、何故譯もなく引き受けたかといふに、之は全く沖野

君のためです。沖野君は私の親友です（向ふ様ではどう思つてるか知らぬが）のみならず一寸變つた面白い男と思つて非常に興味を注いで居る友人です。其人から書けと云はれたから一議に及ばず書かうと答へました。どんな本に何を書くかは頓と考へませんでした。沖野君の書けと云ふのだから、書いて悪るい道理がないと云ふ位の所で引き受けたのでした。

其後あなたにも遇ひました。沖野君の紹介して寄越した丈けあつて之も面白い青年だと思ひました。夫れから書かれたものを見ました。茲處でコツツッ白状しますが忙しい爲めに精讀はしませんでした。少くとも精見はしました。始めから終りまで、二夕晩ばかりかゝつて紙数を繰りました。成る程數奇な運命に弄ばれた。而かも見事に之を切り抜けた

感心な青年だと云ふ感を深うしました。

いろ／＼感激した事は澤山ありますが、之を一々述べては際限がありませんし、又之を適當に寫し出すべき文筆を有つてゐません。只一つ私の最も痛切に感じた事を申しまするならば、それはあなたの御母さんの犠牲的愛情であります。あなたは今日の成功に負ふ所ある人々の名を巻頭にかゝげて居りますが、夫れ／＼皆感謝に値すべき方には相違ありませんけれども、其中の殊勳者は御母さんであります。私はあなたの御母さんを喜ばせ申す爲にも、序文なり何なり書かずには居られない様な氣になつたのであります。

あなたの經歷は數奇を極めたものです。之を立派に切り抜けたのは敬服に値します。併しあなたは之を決して獨特なものと思つては不可

ません。案外世間にはあなた位の辛慘を嘗めた人又現に嘗めてる人は多いのです。茲處にあなたは勝利の虚誇を抑へて、謙遜と同情との徳を養はねばなりません。但しあなた位の經歷の人は珍らしくないと申しましたが、あなたの様に立派に之を切り抜けられた方は誠に尠いのです。此點に於てあなたは本當に偉い。併し其効の大半はあなたの物ではなくて御母さんの犠牲献身の賜です。否其功は御母さんに屬するものです。あなたは今後の努力によりて之を綺麗に御母さんに返さねばなりません。即ち老いて淋しき御母さんに十二分の慰樂と、満足とを與ふる事が今後あなたに残されたる債務です。而して私も何だかあなたに代りて御母さんを少しでも御慰めしたい様な氣になりました。私がおあなたの本に序文を書いたと云ふ事が、御母さんを喜ばすか如何かは知りませぬが、若し本

が出来て一冊を御母さんの膝に献するとき、私も亦滿腔の敬意を表して茲處に筆を執つたと云ふ事を傳へて下さい。御母さんの心盡しを一人でも了得した者があると知られたら、マンザラ悪い氣持もされないでせう。斯んな事をダラ／＼書いて、あなたの本を江湖に推薦する所以になるか如何か判りませぬ。たゞ私はこの本が出て御母さんが嘸嬉しく思はるゝだらうといふ事を考へる丈で満足します。早くあなたも奮發して御母さんと一緒になつてお上げなさい。此次にもし機があつたら更に一段の成功を收めて、母子團樂の愉樂を私共に頒つて下さい。その時にはまた御差支なくばも少し氣のきいた序文でも書きませう。思ふ事無遠慮に書いて濟みませぬ。

大正九年五月念二

法學博士 吉野作造

著者より讀者へ

明治三十九年、私が十五歳の春二月、家運再興の使命を帯びて紀州の山奥を脱走して以來、今年大學を出る迄十四年間の長い月日、私は言ふに堪へない程の苦勞を致しました。新聞も配りました。牛乳も配りました。小僧もやりました。雪の降りしきる冬の夜の二時頃、坂の途中で新聞を滿載した車の轍が動かなくなつて泣き伏した事もありました。そんな身空であり乍ら矢張り人並に戀も知りませんでした。失戀の味も覚えませんでした。そして煩悶の末九仞の功を一費に缺かんとした事もありました。

顧みれば私の運命は血と涙と汗で彩つてゐます。けれども私は随分情深い仁達の厚い同情に哺まれました。そして私を一個の人間として社會に獨立せしめて呉れました。

私が今自傳『血笑記』を公にするに至つた主な動機はこれらの諸恩人に對する謝恩を記念するに在るのですが、一方に於ては鵬志を懷抱する青年諸君に向

つ。"Impossible is the adjective of fools."と、ナポレオンを真似て強く高く叫びたいのです。けれど、誤解下らない様に。私は諸君に向つて新聞を配り車を引いて大學を出よと勸むるのではありません。坊間に驚がる、月並な立志小説を書いたのでもありません。要は、諸君が如何なる難事業に對してでも、鐵の様な意志を以て突き進まれん事を切望するのです。

終りに、此書の執筆中何かと注意して下つた大伴茂、竹田富三郎、田岡耕諸君や、郷土史探究に就いて御盡力を得た杉谷靜一郎翁、森彦太郎、山内一郎、玉置盛一諸君にお禮を申し上げます。

とりわけ、恩師吉野作造博士が御多忙中なるにも拘はらず序文を賜つて巻頭を飾つて下さつた事と、同郷の先輩沖野岩三郎先生が本を出すに就いて細い處まで何もかも御面倒を見て下さつた事に對しては、實に感謝の辭がありません。此の書が讀者諸君の前に提供せらるゝ頃、著者は鵬志を圖南に伸ばすべく、熱帯植民地の經濟關係の關鍵を握る某銀行に入りて、椰子の實みのる南の國の投資事業の研究に没頭して居るであります。

千九百二十年七月

著者

大學を出づるに當つて謹んで此一篇を

子 母

影島の叔父

松本秀葆

同郷の知人 林正夫

元名古屋裁判所監督判事 寒川清

現名古屋在住辯護士 山本敏一

徳川頼倫侯經營 南葵育英會事務担当

紀伊教育會日高支部長 小池甚一郎

日高紡績株式會社社長 戸田銀行頭取 戸田實

右の人々の膝下に捧げまつる



立
ち
の
記

生ひ立ちの記

富士の山ふところ

東海道線を駿河灣の西隅富士河畔の富士驛に乗捨て、芝川行の燐寸箱を連結させた様な輕鐵に投ずると、汽車は本線に垂直に裾野平野を走つて居るが、廳て次第に勾配を覺えて、危げな様子に、遅々として富岳に向つて突進した後、一時間足らず費つて富岳ふところに發達した大宮の町へと辿り着く。

大宮は交通上の關係から、郡役所を東海道線に近い山麓の吉原町に持つて行かれなければ、それでも富士郡第一の大きな町で、官幣大社の淺間神社が鎮座し、富岳への一方登山口になつて居て、夏期などは非常な賑かさを呈するのである。町其者の所在も亦、富士の高嶺を築山として、其の左右に箱根愛鷹の諸連峰を侍簞せしめ

駿河灣を泉水として、更に伊豆半島駿嶽の彼方に漂茫際なき太平洋を望むなど、正に東海唯一の雄境と云つても過言ではない。おまけに此所は非常に水の清冽な所で千古の雪が富岳の腹中に溶け込んで其の胎内を廻り旋つて、終に大宮の町に滾々と湧き出る眞清水は、頗る晶瑩瑩徹で、どんなに雨が降續いても決して濁つた事は無く、青味を帯びた水晶の様な透徹さを見せて、深い水底の小石でも数へられる位である。

町から、二里半更に高原を上げば有名な白絲の瀧があり、三十町程下れば武田機山幕下の謀將山本勘助が呱呱の聲を擧げた富士根驛がある。今猶現存する勘助が幼時嬉戯した古跡を訪づれて、四百年前の天下の智將を偲ぶも一興であらう。

Vater の ローマンス

劇曲の舞臺に變りは無いが、時は今から三昔の以前に遡る。

其頃には勿論のことまだ輕鐵が敷かれて無くて、大宮町に到る唯一の交通機關として鈴川驛から單線の鐵道馬車が、悠閑な喇叭を吹き、吉原の町を通る。

大宮の町から北西二里許の所に、富士川の支流である芝川が奔流する。明治二十三年、夏の日の午後天氣の好い時には屹度此川邊りに、鮎の囹箱を提げて立つ二、三、四の青年が居た。かつぶくの好い體に薩摩上布の尻端折つて、幅廣い縮緬の兵子帯に、無雜作に金鎖を巻付けた恰好は、何處から見ても避暑に來た釣道樂な物持ちの若旦那と見受けられた。青年が初めて川縁に其姿を現はした時は、土地の漁夫達も「止せば好いのに」とせゝら笑つて居たが、歸り掛けには尺餘の大きな鮎が籠に二十、三十と入つて居る程彼は鮎漁に上手であつた。

青年の名は英一郎と云つて、當時新に設けられた沼津區裁判所大宮出張所の登記官であつた。

間もなく青年は登記官を辭して代言生活に移つたが、或紛糾した事件の委囑から

町の小間物問屋の一老人と懇意に成つた。雖ては町政の圈内に割込まうとの野心ある青年は、頗る巧妙に町の重立つた人々の心を收攬して、到る所で重寶がらるゝ様になつた。小間物屋の大塚老人も青年の氣質を愛し、前途を頗る囑望した一人で、其の中、青年は大塚老人の好意を受けて、淺間社前の櫻屋旅館から小間物屋の裏の離れへ移り住む事となつた。

小間物屋の家には五人の子供があつて、一人の長男は東京から品物が着くと、直ぐ夫れを近所近在へ卸しに出かけた。残りの四人は皆娘達で、一番上の娘はとつくに鈴川在の大澤と云ふ家へ嫁いで居た。十八になる二番目の娘は、高等小學校を卒業すると一年間補習に通つた後、自宅で裁縫や活花を習ふ傍、二人の妹達を督して家事を手傳つて居た。綺織は普通であつたけれ共、優しい中に負けず嫌な氣性で、町の娘持つ母親は「江戸屋の多佳ちゃんを見倣へ」と娘に説き聞かす程確乎して居て身體の弱い母親を煩はさないで、もう彼女は自分一人で總てを切り廻してゐた。

小間物屋の家族は皆好い人達許であつた。主人は東京の製造元から直接に小間物類油類を取寄せて賣捌く傍、自分でも種々工夫を凝らして、專賣特許を得て居る品が二三種もあつて、店の繁昌する暇々を、釣に行つたり碁を打つたり、俳句を讀んだりし乍ら人の世話が好きな彼は、町の種々な公共事業にもたづさはつて居た。

芝川邊りに鮎を釣る漁夫も見えなくなつて、いつの間にか、羽織を引つ掛けたい様なうら寒い風が肌に沁む様になると、青年の歸國を促す手紙が國元から頻りに届いた。併し青年は何とかかとか云つては小間物屋の人達の親切に甘へて、日一日と歸國を延ばして居た。青年は何時しか娘のたかちやんの甲斐／＼しい立居振舞に目を着けて居たのである。其の中に青年の父親から小間物屋の主人に宛て、長々しい禮文句の終りに、悴の歸國を取計つて戴き度いと云ふ依頼の手紙すらも届く様になつて、兎も角も青年は一先づ南の國へ歸つて行かねばならなくなつた。

明日出發と云ふ前の日に、青年は思ひ切つて懸案の解決に着手した。何時出發し

ても可い様に準備の出來た青年の居室に、

「最後の一席を一つ圍みませうかね」と云ひ乍らは入つて來た主人に向つて、青年は、

「多佳子さんと結婚し度い」と、大手門から斬込んだのである。主人は、

「さうですね……」と云つて、不承諾では無いが全く豫期し無かつた問題に逢着したと云ふ表情を暫の間見せた後、

「妻や娘とも篤と相談して明朝御返事致しませう」と云つて、二三番鳥籠を闘はした後其の室を出て行つた。

出發の日の朝になつて青年が獨り思案に暮れて居る所へ、多佳子が眞赤な顔をして何時に以合はず恟々しながら入つて來た。

政治運動が生んだ悲劇の發端

明治廿五年の二月に行はれた、解散を受けて國會議員臨時總選舉は、我民權發達史の一大汚辱とも云ふべき、時の内相品川彌次郎が選舉大干渉を行つた時だ。天下は民黨吏黨との二手に別れて角逐したのだが、板垣退助は自由黨を携^ひけて呼號し、其の別働隊岳南自由黨は、富士郡岩松郡の影山秀樹を擧げて、郡長出身の吏黨吉川宜英と大宮の町を中心に鎬^こを削^けつた。惡戰苦闘の板垣は影山應援の爲に、江原素六を大宮へ遣^{つか}つて自身は甲州の加賀見嘉平の選舉區に臨んだ後、二月七日の富士嵐に寒風肌を刺すの日、富士川を舟行南に下つて岡山に赴く途中を、岩淵驛前の一旅舎の階上に開かれた岳南自由黨員の歡迎會に臨んだ。角袖巡查のギッシリ詰つた會場の一遇に、挨拶の爲に立つた板垣の風姿は、着流しの羊羹色にさびた紋附羽織の如何にも身すばらしい有様であつた。

「解散に次ぐに解散を以てせらるゝ事は、我黨の最も苦痛とする所であるが、どうか諸君は堅忍不拔の態度を以て、國家の爲に、最後迄も闘ふ覺悟を持つて戴きた

い」と云つた彼の態度は、至誠面に現はれて實に聲淚共に降るものがあつた。

板垣の去つた翌日、大宮西町の大富座に開かれた影山の應援演說會に臨んだ。此時演壇に立つた一青年は、之より先、貴族院議員の陸軍中將小澤武雄が、明治二十四年の第二議會の貴族院内に於て試みた、國防に關する演說が、端なくも政府の忌諱に觸れて、陸軍中將の官名を剝奪された事件を引用して、憲法第五十三條の解釋論から引いて論鋒が陛下の御身に迄及んだ刹那、待構へて居た臨席の警部と巡查部長とは壇場に踊り上つて、左右から青年の手を取つて引摺り降さうとした。場内は沸返つた。青年は落着拂つて警官に兩手をとらした儘、悠々と陛下の御一身に關する前言を取消すと其儘サツサと演說を續けて、廳で結論に到達すると悠々と壇を降つて群衆に紛れ込んだのであつた。爾來青年の身邊には常に角袖が捕繩の端を確と握つて付纏ふやうになつた。

長田青年が政治運動に干與^{カニマヒ}り初めてから、何時の間にか其の身の周圍^{まはりに}を藝者と酒とが圍繞^{とりこ}く様に成つて、次第に、歸宅も夜更け勝らに、玄關へ出迎ふる若い妻に酒臭い息を吹掛ける事も度重つて來た。が併し、其れは當時に於ける政黨員の常であつて、夫婦の間には、猶新婚當時の愉快^{うれしさ}が可成りの濃度を保つて居た。

兎角するうちに早くも二年の歳月は流れ去つて、其の年の暮二人の間に擧げられた一兒——天下の靈峰富士の胎内から滾々と湧出づる水晶の様な眞清水に、産湯を使つた其の赤ん坊——は、實に斯く云ふ筆者松本眞一である。

小さな追憶

二年近く父母は大宮の町に住むで居たが、僕が生れると前後して外祖父が身故つたので、僕の二つの時に、病身の外祖母を伴れて鈴川在の富士岡へ移つた、其處は叔母達の嫁づいて居るところで、僕も皆に可愛がられて大きくなつて行つた。

相變らず父は政治運動に東奔西走して、交際上料理店^{レストラン}に出入はしたが、時々泥酔して歸る以外に楽しい家庭を脅威する種は少しも蒔か無かつた。

天氣の好い朝は定つて父は僕を抱いて、「神峰様を拜みなさい」と云つて朝暾^{あした}に秀でた富士をさし示した。僕は小さい手を合せて「神峰様はいちやつ」と、頭を下げたりした。明治廿七年の暮、僕が三つになつた時長弟の謙治が生れた。

頗る奔放な父の血を享けた僕は、小さい時から始末に終へない腕白坊主で、玩具なども靜的の物より動的の物を好んだ。叔母達から自動的に走る汽車や汽船の玩具を貰つた時、動いて居る間は溫和^{おとな}しく遊んで居るが、動か無くなると突然放擲^{ほうてき}り出して駄々を捏ねだした。更に玩具の様な物よりは、生きたもの生きたものに、其の惡戯^{いたづら}の相手を求めて行つた。父は生物の中で、此腕白坊主の最も好い遊び友達として、三尺許りの大鰻を一つ買つて來て大盥^{だひ}の中へ放つて呉れた事がある。僕は朝から晩迄其れに獅嚙^{しかみ}付いたり、眞裸體になつて頭を擱んだり、尾を引張つたりした。

つる／＼滑べるのに疝癪を起して猛烈に攻撃すると、とう／＼道の大鰻も日暮頃には白い腹を見せた。

二町許離れた祖母の妹の嫁いで居る高橋と云ふ家へチヨコ／＼出掛けて行つた。「高橋の叔父チャン、叔父チャン」と、玄關傍の窓の下で呼ぶと、叔父の居た時は、

「坊、又来たねアハ………」と笑つて、定つた様に「裏へお廻り」と云つた。そして決して叔父は「上へあがつて遊んで行け」とは云は無かつた。

叔父の家の裏庭には泉水があつて、赤や白や黒の澤山の鯉鮒が泳いで居た。僕が裏へ廻つて泉水の傍へ行くと、叔父は大きな箆と桶を持つて、ニコ／＼し乍ら出て来て、お尻をくるつと捲ると泉水の中へ這入つて鯉を追廻はすのであつた。かうして、叔父の掬つて呉れた尺餘の大きな鯉は、直ぐ桶に入れられて僕の遊び友達に呉

れるのであつた。其時叔父の末の娘が何時も其桶をさげて僕の家まで夫れを届けて呉れた。

其の叔父は實際好い人であつた。何時も嬌々としてよく僕を首馬にのせてくれたものだ。併し、悲しい事には今はもう其の叔父は此世の人でない。

たちはなの咲きにほふ國へ

僕が五つ、謙治が三つの明治二十九年は日清戦役後の經營に多忙な年であつた。父は、母と結婚するに就いて外祖母の存生中は、駿河の國を去らないと云ふ約束であつたけれど、實家の事情は如何しても、父の外遊をいつ迄も許さ無かつたので、其年の彌生半に父は母と僕達とを伴れて南の國へ行く事に決定した。最初は祖母も母や僕達を交通不便な遠國に手放す事を不同意であつたが、一年に一度は屹度僕達を伴れて來ると云ふ父の言葉に、所詮何時かは訣れ無くてはならぬ運命だと思つて

とう／＼父の意見を容れたのであつた。

出發の其日は、送る人も送らるゝ者と俾を連ねて一里の道を鈴川驛に走らした。驛で發車の時刻が迫つて、プラットホームに立つた祖母や若い叔母達は「又た何時遇へるのやら」と、云ひ乍ら、人目構はず車窓に凭れて潜々と泣いた。父は目を潤ませ乍ら靜かに彼等を慰めて居た。

紀州の山奥に歸り着く迄の途中、大阪から汽船に乗つて紀伊半島を迂回する時、母と僕と酷い船暈を覺えて一等室の寢臺の上で死ぬほど苦しんだ。田邊の町から上下四里の虎ヶ峰を越ゆる時、謙治と僕と二人は駕に乗つた。父も母も徒歩で後からエッチラオッチラと坂道を上つて來た事を覺えてゐる。謙治が道の兩側に生ひ茂つてゐる薄の葉を駕の中からとらうとして、其の葉で小さい指から血を出したので、僕が其の指を嘗めてやつた事や、途中迄迎へに來た元の下男に兄弟の者が背負はれて、家へ歸つた時、「さあ／＼此家は坊んどこじやよ」と云ひ乍らにこ／＼縁側に走り出

て迎へてくれた未だ見ぬ祖母の顔を、指を啣へた儘、凝乎と見詰めて居た時の僕の姿が、今に僕の記憶に淡く残つてゐる。

熊野灘

三國一の名瀑那智を天空に懸くる紀伊山脈の盡くる所、太平洋岸一帯の頗る崎嶇たる奇岩怪石は、鯨鯢を浮ぶる黒潮の澎湃たる襲來を待つてゐる。

紀南の天地、景趣頗る峻峭鬱勃たる氣宇が澎湃として居る。若し紀南人の性格を知らんと欲するならば、先づ熊野巖頭に立つて其の怒濤が奏する豪壯の快調に耳を傾けるが宣い。

紀藩の祖、之を南龍公賴宣は、虎伏山竹垣城に巢喰つて虎視眈々、慶安の革命兒由井民部と氣脈を通じて、宗家を顛覆しようとしたと噂された程の俊髦だつた。

沖の暗いのに白帆が見える

の、俗語に剛腹無比な南國人の意氣を誇つた機略縦横、豪華な生活を極めた、紀文大盡。さては當代の謀叛兒天一坊の話も亦、紀州人の性格を能く戯曲化したものである。

例の竹橋騷擾事件に、官職を奪はれた岡本柳之助は「文武大小の官に就く事を禁ず」と云ふ痛快な辭令を貰つて、暫く野に嘯風して居たが、明治二十八年十月の朝鮮王妃事件に大變な事を演つて了つた。

岡本と活躍を前後した、剃刀大臣陸奥宗光も亦叛骨隆々たる男で、元老院議官時代、閥族政府を顛覆しようとし宮城監獄に繋がれ、危く藩閥の徒黨から一服盛られかけて伊藤博文はくぶんに助けられたのであつた。幸徳秋水の社會主義運動に紀南の天地から多くの關係者を出したと云ふ事も、峻峻な熊野景趣に因する所が、無くてはならない。更に、紀州人を女性的に代表するものは、安珍と戀を語つた清姫で、其情や

焰の如く、彼女は正に全人類中の女性の代表者たる資格がある。

僕の郷里——日高川上

熊野浦の「はまゆふ」は白く優しく咲いても流石に熊野灘は波が荒い。難航で知られた大阪商船紀州航路の、唯一の良港とも云ふべきものに田邊灣がある。

家康の眼識を得て頼宣の附家老となつた安藤帶刀たてわきの、五萬石を食むだ舊居城趾で、人口二萬。灣を左右から抱えて居る瀬戸半島には、京阪人士の間に可成り膾炙されて居る鉛山温泉があつて町の繁昌を援けて居る。此の附近一帯は紀州でも頗る氣候の好い所で、銀砂緑松の景、それに熊野灘に洗練せられた潑瀾たる、鯛や松魚が澤山獲れて常に食膳を賑はす。

町の片隅かたすみにある縣社資格の鬮鷄神社は、熊野十二社權現を祀つて、以前之を新熊野神社と稱とえて居たのであるが、治承四年、巨頭公頼朝が兵を伊豆に擧げた時、熊

野別當湛増が、源平何れかの去就について思案にくれ、其の社前で赤白二羽の雞を闘はせて以來、闘雞社と稱ぶ様になつたとの傳説は誰も知つてゐよう。

田邊から三里山奥に入つて、上下四里の虎ヶ峰を北東に打ち越ゆると、其處は最う隣郡で、紺碧の淵を浮べて居る日高川の岸邊に降立つのである。京洛から修道の爲に熊野路の旅へ出て居た美しい若僧を戀うて、後を慕つた清姫が、折柄の増水に、無情い船頭を恨み乍ら蛇になつて渡つた川、其の日高川は迂餘曲折して四十八里の長さがある。其の水源龍神村が、僕の故郷で、此の麓から僅か四里の水上である。其所には昔弘法大師が、巡錫の途次發見したと云傳へらるゝ温泉がある。十數戸の旅館が軒を並べて立つてゐる。非常に交通不便な場所ではあるけれど、清い美しい日高川の流れが、旅人の夢を亂し勝ちに苔蒸す巨巖の間を、潺湲と縫うて居る影趣は、正に南宋畫其儘の一幅である。

泉之土甚狭 居民十餘家 高下其丘居焉

兩山爲峽 隱蔽日月 非停午不見晷

山多丁香花 片香襲人 又多瓜藪

居人曬根 造粉以鱗 溪中游魚數

鱗魚尤美

祇南海——龍泉紀行文

此溫泉場から、山百合の咲く青葉道を、日高川の左岸を傳つて、一里足らず下ると、三抱も四抱もある杉檜の鬱蒼とした祇園越と云ふ小さな丘があつて、其處を越ゆれば、同じ龍神村の小字廣井原が、三十軒餘りの人家をもつて、展開して居る。だら／＼の坂道を少し下つて街道から右手を望むと、祇園を脊に、黒塗りの柱門を持つた家が立つて居て、門を潜ると兩側に形許りだが併し田舎には珍らしい築山があり、其周圍を黒板塀が繞つて居る。云ふ迄も無く其れが僕の家である。

泉聲鳥語兩相清 最善幽居少送迎
丘壑煙雲自由足 讀書又足養高情

壬午孟冬宿於松本君家偶賦其實景以供主人之一笑

三芝迂史庸

三芝、古田庸氏は明治十五年頃の日高郡長であつた。

くの字成りに流れて来た日高川が廣井原庄に入ると、深潭となつて、水はとろりとした藍色に見える。明治廿二年八月の大洪水から、川の形は昔の面影を存せない程變つたが、それでも未だ僕の幼少の頃は、名前も其の儘に、牡蛇淵、牝蛇淵、慈父の瀧、泡の淵と稱ばれる邊りは、物凄^{すご}い渦が巻いて居たり、底知れぬ青い淵が何町と續ひたりして、其兩岸には椽^{とら}だの、樺^{けやき}だの、樅^{もみ}だのが淵の上に覆ひ被^かつて居て生命賭けの仕事する荒肝^{あらい}の筏乗りすら、其處は降りて通つた位であつた。

村の美しい娘の處へ、毎夜何處からとも無く綺麗な若衆が忍んで来て、娘と契る様になつたが、娘が幾度^{なんど}住居^{すまひ}を訊ねても明かさぬので、或夜、人に教へられた通りに赤い絹絲の先きを窃つと、若衆の身に結んで置いて、其翌朝、絲の行方を辿つて行つたら淵の上で糸の端が断れて居た。娘が凝乎と淵の中を見入つて居ると、美しい音楽が淵の底から聞えて来て、娘は其儘淵に身を投じたと云ふ、可成りに僕達小供時代の好奇心を唆つた傳説ある淵。村人が木樵の歸途、其の淵の傍を通つた時、何丈とも知れぬ大きな鯉が、笠のやうな鰭を動かし乍ら遊びで居るのを見て、その夜から熱病に取り憑かれて、遂々死んでしまつたと云ふ怖ろしい昔話なども、僕達の小さい心を随分傳説の境に引入れたものであつた。

村の何方を向いても山又山で、何百年と斧を入れた事の無い森林が彼方此方に生茂つて居た。従つて鹿や猪が澤山住んで里に出没しては、作物を荒すので、村人達は申合せて、萬里の長城の様に何里と山裾に柵^{さく}を周らしては防禦したりした。父は

頗る獵が上手で、一日に二匹も大鹿を射止めて來た事もあつた。鹿や猪許りでなく恐ろしい狼も時々里に姿を現して、村人を脅かした。寒い冬、冬夜の夜更に家内の者達が、圍爐裡の周圍で熱い蕎麥湯を啜りつゝ、夜話に耽つて居る時、僕はよく祖母の膝に凭れた儘、吹雪の唸りに交つて聞えて來る狼の遠吠を耳にした事もあつた。

鶴ヶ城の四天王松本彦太郎

僕の郷里龍神村字廣井原から、日高川に沿うて下つたら三里、山越に行つたら二里の、隣村上山路村字東に城趾がある。馬場も屋形跡もその附近に存して、郷民は今猶之を鶴ヶ城と稱んで居る。所謂戰國時代に於ける群雄鬪争の、その縮圖は此處紀南の一隅に於ても今猶ほ見られる。鶴ヶ城主玉置彌惣左衛門太夫は、日高川の上流、山路の庄三萬石を領して居たが、天正十三年、豊臣秀吉が、羽柴中納言秀次や大和大納言秀長と共に、自ら兵十萬を率ゐて紀伊平定の師を起すに及んで、その先

鋒隊仙石權兵衛の爲に計略に掛つて、城を落され、腹掻割いて果てた。

玉置氏の祖は、大和國十津川郷玉置山に根據した玉置の庄司で、元弘元年護良親王の十津川微行の際、扈從して諸州に轉戦し、興國五年、更に紀伊半島の北朝軍剿滅の使命を帯び、沿岸を傳うて入國し、日高川を溯つて山路の庄に城を樂き増賀城と名附けたが、居城する山の恰好が鶴の羽を擴げた形に似て居た所から、何時の間にか郷民が之を鶴ヶ城と稱ぶ様になつた。玉置氏入庄前の山路庄は、久保、古久保、小川、松本の四豪族が各自土地を分割率領して居たが、玉置氏の來るや、繪旨を示したので、其幕下に歸順し、此處に所謂鶴ヶ城の四天王なるものが形作られる様になつたのであつた。間も無く城主玉置氏は上總守に任官して、玉置左衛門太夫上總守直信と呼んだ。落城したる玉置氏は直信十一代の孫であつた。

鶴ヶ城四天王の隨一松本氏の祖は、小松三位重盛に出で、其屋形は城の南丸に位して居たから郷民之を南殿と稱んだ。落城の際、松本彦太郎盛次は城主直信の意を

含んで、其長子竹松丸を伴ひ一旦安藝國へ落ちたが、十七歳にして竹松丸没したの
で、郷國に引返へし龍神の庄廣井原に隠れて農に歸した。直信の次子兵部次郎は生
來盲で、一旦田邊在に落ちたが、天下が平定すると、山路庄に歸つて土居に屋形し
た。其子孫は今日尙現存する。他の四天王の中小川は龍神村奥の大和の十津川郷に
近い小森の小川壇に落ちたが、間も無く廣井原庄に出て、其處に濠を廻らし數町の
石垣を築上げて永住と定めた。現に、其處には「寺野」と云ふ屋號の下に小川逸之
進氏が當主として一家を治めてゐる。

廣井原下庄に住居を定めた久保の大陣屋は、口碑に依ると之も素晴らしかつたら
しい。十五六もある室々の外側に廻廊下が繞つて居たと云ふ。此頃村の青年達が其
陣屋跡に鍬を入れて、鏡と壺とを掘出したが、其品は頗る珍品らしく、郡役所から
委嘱せられて、日高郷土史の編纂中である森彦太郎氏が、帝室博物館に提出したと
聞及ぶ。

廣井原庄に居を構へて、弓矢の代りに鋤鍬を取る様になつた松本氏は、其後も依
然として其地方に勢威を張つて居た。延寶年間に出來た日高鑑は、山路庄を日高庄
とも云つて、松本彦太郎重次が、近村數ヶ村の大庄屋として宰配を振つて居た事を
物語つてゐる。併し元祿の頃から、政權は小川家に移つて徳川の末世時代は、當主
逸之進の先考團十郎氏が大庄屋として山路庄に臨んで居た。

家運の没落

松本彦太郎重次の没後、貞享の末から松本家の勢力は地に萎して居たが、享和
の頃一人の女丈夫が現はれて、松本家中興の祖となつた。彼女は俗名をきくと云つ
て文久二年八月十七日、八十七歳にして没、戒名を心空院悟室良禪大姉と呼ばれて
居る。僕から五代の祖に當る婦人で、松本政之の後室であつた。年若くして夫に先
立たれたが、三兒を守育て乍ら家事に頗る勤勉であつた。負かぬ氣の或事情から當

時の大庄屋小川家と確執して訴訟に敗れ、其の居庄廣井原から三年間の所拂を喰つた時、彼女は山徑三里の隣庄丹生川在に一先づ移居して、其處から三年の間雨が降らうが槍が降らうが、毎日の様に下女下男を伴れて廣井原庄にある自分の田畑を耕作に通ひつめた程、男勝りであつた。此頃から家運は隆々と擡頭し初めて、政權こそ失つたれ、徳川の中世以降紀伊家の賦税金に毎年百兩宛献金し得らるゝ家は、山路庄に松本家のみであつた。

僕の生れた頃も、田畑こそ五町餘りしか無かつたが、二萬圓三萬圓する檜山、杉山が彼方の山峽たにあひこなた此方の峰に生ひ茂つて、山路の松本家と云へば、御坊田邊の町の材木商、さては和歌山大阪邊りの材木問屋迄鳴響いて居た。視察とか講演とかに來る知名の士は、大抵龍神村役場のある湯本温泉場迄の中休憩やまひに、僕の家を迎へて款待した。明治三十一年の秋、時の縣知事小倉久氏おぐらひさしが縣内巡視の歩を僕の村に運んだ時父は不在で、祖父が知事一行を鹿狩に案内したり、丸い机テーブルを庭へ持出して宴を開き

御坊の町へ嫁いで居る當時十七歳の百合子の叔母が、恥かしさうに酌をして廻つたのは、僕が七つの時だつた。

が併し、其の松本家も僕の生れる前後から、倒壊の崩うたが見え始めた。雖て家運が秋風落莫にうつつて、見る影も無う零落ちぢれて行つた其の第一因を、僕は客觀的立場から僕の廿二の時に他界した祖父の子女教養法の錯誤に歸する。

僕の祖父——松本貞之進は、鶴ヶ城趾の在る隣村東ひがしの杉谷家の次男に生れ、二十三歳の時、松本家に婿入むこいつて來た人で、少年時代から頗る學を好んだ。牛を逐ひ草刈る暇にも手に四書五經を繙ひもといて居た。従つて祖父の松本姓を名乗る頃は、近郷稀に見る學者となつて、徳望は一郷に高かつた。そして彼は村の公共事業に盡瘁する傍ら、詩を作り歌を詠じて天地自然と親んだ。

瓦然過得古稀春 俗務未醒塗世塵

七十年來無寸績 雪花風月兼清貧

これは彼が晩年家運大いに傾いた後の吟懐であつた。

28

が、情の人は理の人で無い。祖父は貨殖の途に頗る恬淡で、其子女達の教養に就いても放任に過ぎた。加ふるに、祖母も亦子女の教養法には全く門外者であつた。父や叔父達は成長すに従つて、皆和歌山市に出で、中學の門を潜り、進んで専門校にも入つたけれど、何れも金満家の息子に有勝ちな黄金に蝕れて、中途でぐれて仕舞つた。

父は、駿河の大宮町在住時代には可成り眞面目な生活を營んで、町の重立つた人々から、前途を囑望せられた程であつたが、奔放な其性格が、彼を政治運動に驅つて、酒と女が其身邊を取巻き初めるやうになつた。

愁海棠

駿河の國の、母の郷地から紀州の山奥にある生家へと、引上げて行つた父は、半年許り實家に滞在した後、事業の都合から、母と僕等を伴れて、十五里離れた日高河口にある御坊の町へ出て其處で一家を構へた。夫れは僕が六つ、謙治が四つの年であつた。父はよく商用で和歌山や大阪へ出掛けて行つて、母や僕等兄弟は、幾日も父の歸宅を淋しう待ち侘ぶる日が續いた事もあつた。

「お菓子頂戴、お菓子頂戴」と僕達二人の者が悄然と針仕事をして居る母の左右から縋り付くと、母は兄弟の顔を凝乎と見乍ら涙ぐむ事すらもあつた。無論其時分の僕に母の泪の種を知らう筈が無い。けれど、父は月の中數へる程しか家に居なかつたり、時偶に歸つて來ても以前とは違つて、荒々しい言葉を母に向けたりしたから子供心にも、父は何處へ行つて居るんたらう。何故母を彼様に叱るんたらうといふ

29

疑惑が胸に湧いて来るので、其の理由を母に訊ねた事も幾度かあつた。時としては兄弟の者が、裏の畑から土だらけになつて歸つて來ると、母が縫ひかけの着物の上に俯伏して、シク／＼と泣いて居るのを見た事もあつた。

「母ちゃん此頃泣味憎になつたね。偉い人になる子は泣くもんじやないつて自分で云つて居乍ら、自分で泣いてらア。何故其様に悲しいの？」と、母の脊中に縋りつき乍ら母の顔を覗きこむと、母は淋しく笑つて、

「母ちゃんはお腹が痛いのだ」と、定つて答へて其以外には一言も云は無かつた。父が十日も歸つて來ない時に、

「父さんは何處に居るんだろ」と訊くと、

「父さんはね、大阪の方へ御商賣に行つて居るのだ」と、しか致へて呉れ無かつたのである。

夏も真盛りの七月末だつたらう。或日裏の畑で謙治と蜻蛉を追驅け廻はして居ると、女中のお美喜が、

「坊つちやん、坊つちやん」と、呼び乍ら手招をした。

「謙治、屹度お菓子を呉るんだよ、喰べ度くないね、それよか蜻蛉を捕ろや」

弟の賛成を求めて、僕は尙動かずに居ると遂々堪り兼ねてお美喜が走つて來た。

「坊つちやん、早く居らつしやい、お父さんがお歸りなさいましたよ」

「何だい、早く云へば可いに」

生來粗雑者の僕は、謙治を放擲かして庭傳ひに奥座敷に飛上ると、久方振りに父は歸つて居た。其れに見知らぬ何處かの婦人が赤ん坊を抱いて、母と懇ろに挨拶をして居た。

「お父さんお歸り。」僕はびよこんと頭を下げて父の傍へ坐つた。

「真！不相變惡戯許りやつて居るね」

父はかう云つて、僕の土だらけの兩の手を、女中の持つて來た濡手拭で拭いて呉れた。聽て謙治も家へ上つて來て、母の傍へ坐り乍ら父に拶揆した。父は見知らぬ婦人を兄弟に紹介して、

「此の人は此度家へ來たお前達の小母さんだよ。眞坊も謙坊も此の小母さんの云ふ事もよく聞くんだよ」と、云ふと、

「坊つちやん、眞個に温順しうおますな」と、其の婦人が嫣然し乍ら僕達に愛想を云つて兄弟のお辭儀を期待すると、僕と性格のころつと變つた女の子の様に柔しい謙治は、手について挨拶をしたけれど、僕は凝乎と其婦人の顔を暫く睨みつけて居たが、突然、

「貴様ツ、此家へ來ても母さんを虐めるんじゃないぞ」と、小さい唇を尖らかし乍ら僕は大聲で嘔鳴つたのであつた。其時の父の険しい眼、母の當惑した顔、想ひ出す度に今に眼前にちらつく。

何故此様な暴言を吐いたか、夫れは今でも判ら無い。其婦人は其れ迄全く見知らぬ、名前も聞いた事の無い人で、父と如何な關係があるとか、母の泪の原因が彼女に存するとか、そんな事を六つや其處いらの僕に知覺せられよう筈がない。無論母だつて父の妾の事に就いて、一言だつて僕達に云つた事は無かつたのであるのに……

其婦人は父が商用で度々和歌山へ出張して居る中、其處で馴染んだ藝者で、父に落藉せられて暫く和歌山に住んで居たが、父が田邊の町に妾宅の造營を始むると同時に、其の出來をまつ間を父に伴れられて來て、僕達と一時同居する様になつたのであつた。

其婦人は母より無論若かつた。可なり面白い性格を持つて居て、僕も随分可愛がられた様だつたけれども、如何しても僕は其婦人に馴れなかつた。初對面の日に、「貴様ツ」と呼んでからは、如何に父に叱られても、母に訓戒されても「貴様ツ貴様

ッ」と、呼捨にして居た。母は其婦人に對して非常に氣の毒な思をして居るらしかつた。

或時僕は其婦人と一所に、町から一里程離れた安珍清姫で名高い鐘巻の道成寺に參詣した事があつた。其婦人と一緒に行く事は心から嫌だつたけれど、道成寺へ行つて見たいばかりに、兎も角も伴れて貰ふ事にした。婦人は僕を抱いて俥に乗つた。「貴様に抱かれるのは嫌だ」と云つて、婦人の膝から俥の蹴込へ迂り降りて、其處へチヨコナンと胡坐を搔いた。立關から父が嘸鳴つた。母も泣く様にして訓したけれど、僕は遂に其儘車夫に梶棒を上げさせた。俥夫は笑ひ乍ら俥の幌をかけた。參詣の歸途に、婦人が何か欲しい物を買つて上げようと云ふから、薄荷板を喰べたいと云つたら、澤山買つて呉れたので、俥に揺られ乍ら「其様に喰べたら毒どつせ」と婦人が止むるのも肯かすに、皆なムシヤク喰べて仕舞つたら齶齒がチク／＼と痛み出したのであつた。

間もなく父は其婦人を伴れて田邊の町へ行つた。四五日して父は歸つて來たが、僕達は急に近所の旅館の二階に引移る事になつたので、母が女中のお美喜に暇を出すと、お美喜は母と一緒に泪を眼に一つばい浮べ乍ら、何か母に諄々云つて居た。お美喜が愈々自分の家へ歸る準備が出来た時、風呂敷包みと大きな柳行李を縁の隅の方へ押遣り乍ら、僕を物影に呼んで、泣聲になつて、

「坊つちやんよ、大きくなつて、偉い人になつたらお母アさんに孝行をして上げなさいよ」と、云乍ら五錢白銅を二枚出して、

「謙ちやんに一つ上げてお菓子でもお買ひなさい」と云つた。子供ながら焦々しい氣持になつてゐた僕は、

「欲らんやい」と云つて其まゝ黙つて立つてゐた。すると僕の氣質をよく知つて居るお美喜は、街に出て行つて薄荷板を二枚買つて來てくれた。

旅館の二階に移つてから、父は殆んど田邊の町へ行ききりであつた。此頃僕の母は、どんなに淋しい月日を送つて居たであらう。

母は一日に何度も泣いた。僕が悪戯すると云つては泣き、僕と謙治とが喧嘩すると云つては泣き、何でもない事を氣にしては泣いた。のみならず此頃から母は時々癪が差込んで来て胸を押へ乍ら、悶絶する程苦む事があつた。腕白な僕も温順しい謙治も其時は途方に暮れて、

「母アちゃんよ、母アちゃんよ」と云ひ乍ら、左右から苦しむ母に絶りついて泣いたのであつた。

九月に入ると祖父の處から迎へがきて、僕達は又た日高川を溯つて實家へ伴れ歸られた。

十一月に入ると母は三郎を産んだ。

妾宅の造營と枕木三十五万丁事件

父が遊蕩生活に浸り初めてから、祖父は家事をA叔父と相談して行つて居た。けれど、其叔父も亦決して堅實主義者では無つた。何年頃だつたか、父が祖父の代理になつて、何千圓と云ふ材木の賣掛代金を大阪へ取に行き、其金銭が手に入ると、其儘大阪に滞留して、豪遊を始め、幾月も歸らなかつた。祖父は更にA叔父を、金銭受取の爲に父の處へ遣つたら、木乃伊取りが木乃伊になつて、兄弟は其儘一緒になつて浮れ歩いた。B叔父は之を聞いて、急いで上阪したが、これも矢張り其足で京都見物に出懸けて、あちこちと遊びあるいた。此のB叔父には妙な道樂があつて家の前の田を馬場にして競馬會を催つたり、大阪から夫婦の義太夫語りを招んで、義太夫の稽古に夢中になつたりした。

父の兄弟が揃ひも揃つてこんな放埒を初めて、松本家の所有山林に、ドン／＼

人の斧が入る様になると、流石寛仁な祖父も、家産の傾斜を焦慮し初めたが、子煩悩な祖父は、其の可愛子達に積極的な方法をとる事が出来なかつた。

退潮の様に家運がぐんぐん傾いて行く最中、父は田邊の町に妾宅の造營に取かゝつた。其の爲には僕の家の直ぐ背戸山になつて居る、何百年斧を入れた事のない三抱も四抱もある大木の檜林の伐採を餘儀なくされた。

斯うして家の唯一の愛林を賣つて建てた田邊の妾宅といふのは、門構大玄關の實に堂々たるもので、建築の用材は自家の所有山中から選りに撰つた材料を使つた。床の間は檜や紫檀で飾つた。父が此舉は確に松本家の倒壊を早めるに原因したが、其處へ途徹も無い事件をA叔父が惹起した。

A叔父は祖父から家政に關する委任狀を渡されて居たのを幸にして、明治廿九年に大和高田邊の請負業奥田某と、翌三十年から向五年間に、年々鐵道用枕木七萬挺宛都合三十五萬挺を賣渡す契約を締結して、尙双方契約不履行の場合の損害賠償額

を、一丁につき何れも二十錢宛と協定の公正證書迄も交換した。之はA叔父の非常な違算で、杉や檜ならばいざ知らず、栗の枕木は日高川奥に總計でも十萬丁も得られる筈は無かつたのである。A叔父は先づ其の第一回引渡に於て、既に契約不履行に陥つて、公正證書によつて否應なく、直に一萬四千圓の損害賠償金額を相手方に渡さねばならなくなつた。躍起となつたA叔父は明治三十年の末、一先づ四千圓を渡して殘金の猶豫を乞うたが、翌三十一年の春早々、大和北葛城郡磐城村大字岩橋の奈良縣多額納稅者東川熊太郎氏に、所有山有數筆を擔保に提供して、一萬五千圓を借り、奥田某に殘額を支拂つて一切を解約し、此事件は非常な不面目なもとに兎も角も落着はしたが、更に新に東川氏との葛藤が生じて叔父は恥の上塗をやつた。それは、東川氏に金錢を借る時、叔父は擔保物件として提供した山林を、東川氏から派遣せられた鑑定人に、松本家の所有山林に隣接した他人の所有林迄も、松本家の所有として指示したといふ行爲が、間も無く東川氏に知れたからであつた。

明治三十一年の三月、迅雷耳を掩ふの暇もなく、松本家は第一回の動産差押處分を受けた。

差押のあつた日の朝——執達吏の來る前に——七歳の僕と、五歳の謙治と、二歳の三郎とは、菓子や握飯の入つた風呂敷包を持つた子守女に連られて、外へ遊びにやられたのであつた。

甲第十八號ノ一

有體動産競賣調書

奈良縣北葛城郡磐城村大字岩橋九十七番地平民農

債權者

東川熊太郎

和歌山縣日高郡龍神村大字廣井原五百廿五番地

債務者

松本貞之進

請求金額

一金壹萬五千圓也

貸付金

一金二千百圓也

利子

一金六圓三十錢也

差押費用

合計壹萬七千六百圓參拾錢也

右金額ノ辨濟ニ充ツル爲メ明治三十二年三月二十九日當區裁判所揭示場及ビ日高郡龍神村役場揭示場ニ揭示セシ公告ノ通り別紙目錄ニ記入シタル差押物ヲ競賣ニ付シク

(中略)

右ノ告知ヲ爲シタル後競賣ヲ催告シタリ

各競賣物ノ價格ハ別紙目錄ニ記入シタル最高價ノ申出アリタル後ニ三回之ヲ呼上ゲタルモ更ニ高價申出人ナキニヨリ榎本誠之助外三名ヲ以テ競落人ト定メタリ

競落人ハ競買物代價ヲ支拂ヒタリ
競賣々得金ノ計算ハ左ノ如シ

(中略)

右調書ハ最高價申出人及ヒ關係人承諾ノ上記名調印セリ

松本貞之進妻	松本マサ印
最高價競賣人	小川逸之進印
同	崎川安之亟印
同	榎本誠之助印
同	久保田誠一印

右調書ハ債務者松本貞之進住所ニ於テ作ルモノナリ

明治三十二年四月五日

田邊區裁判所

(物件目錄略)

執達吏

豊田篤

甲第十八號ノ二

不動産競賣調書

奈良縣北葛城郡磐城村大字岩橋九十七番地平民農

債權者

東川熊太郎

大阪市西區江戸堀上通一丁目百十八番屋敷辯護士

右代理人

竹田廣助

和欲山縣日高郡龍神村大字廣井原五百二十五番地平民材木商

債務者

松本貞之進

明法三十三年九月十三日當田邊區裁判所及ヒ龍神村役場ノ揭示場ニ揭示セシ公告ノ

通り左ノ

和歌山縣日高郡龍神村大字湯之又字湯之又谷七百十四番

一 山林拾四町貳反九畝貳拾九步
同所七百十五番

一 山林貳拾壹町參反七畝拾八步

(中略)

同村大字廣井原字四之谷九百十七番

一 山林六拾八町貳反壹畝六步

内百分ノ五十壹

一 競賣期日ヲ開キ以下ノ手續ヲ履行シタリ

一 執行記録ハ各人ノ閱覽ニ供シタリ

一 債權者東川熊太郎代理人安川彌吉ハ各競賣人ヲシテ相當ノ保證ヲ立テシメラレ

タキ旨申立タルニ依リ競賣價格ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ以テ保證ヲ立ツルニマ
ラザレバ競賣ヲ許サザル旨ヲ各人ニ告知シタリ

一 債權者代理人安川彌吉ハ各競賣物件ハ合併シテ一緒ニ競賣ニ付セラレンコトヲ
求メタルニヨリ之ヲ合併シテ競賣ニ付シタリ

一 明治三十三年九月二十八日午前十時競賣價格ノ申出ヲ催告シタリ

一 別紙競買申出人氏名價額目錄ノ通り競買ノ申出アリタリ

一 競買人圓山玄次郎ハ債權者代理人安川彌吉ノ申立ニ依リ現金ニテ四百六十五圓
ノ保證ヲ立テタリ

一 圓山玄次郎ヲ以テ最高價額競買人ト定メ其氏名並ニ最高價額ヲ呼上ゲタル後九
月二十八日午後〇時五十分競賣ノ終局ヲ告知シタリ

右調書ハ左ノ利害關係人承諾ノ上記名調印セリ

最高價競買人

圓山玄次郎 印

債務者日高貞之進代人

辯護士 奥野健太郎 印

債權者東川熊太郎代理人

安川彌吉 印

此調書ハ當區裁判所ニ於テ之ヲ作ルモノ也

明治三十三年九月二十八日

田邊區裁判所

執達吏 豊田篤 印

甲第十八號ノ三

三三號第一號

競落許可決定

和歌山縣西牟婁郡上秋律村六百六十八番地

圓山玄次郎

右松本貞之進所有不動産競賣事件ニ付別紙目錄不動産ニ對シ最高價金四千六百五十圓ノ申出ヲ爲シタルニヨリ此不動産ノ競落ヲ許可ス

明治三十三年十月三日

田邊區裁判所

判事 和田啓藏 印

東川家が松本家に對して有する債權全額の満足に總ゆる手段を講ずる一方、東川家は更に、松本家の當事者を詐害行爲のありたるものとして、現行民法所謂廢罷^{はいひ}訴權に依つて、田邊區裁判所に民事訴訟を提起すると、當然に刑事問題が引起つて祖父

とA叔父とは田邊監獄の未決監に繋がる、事となつた。此時僕の母はみどりの髪をふつつりと断つて夫れを氏神に供へ、祖父達の無事出獄を祈つたのを僕はよく覚えてゐる。

明治卅四年四月、田邊區裁判所民事部法廷に於て行はれた、東川家と松本家との第一回對決訴訟は松本家の勝利に歸して、松本家は其關係辯護士坂本彌一郎、杉原佐一郎、奥野健太郎、山敷宗一の諸氏に對して千七百圓の謝禮を呈した。東川家は更に此の訴訟を大阪控訴院に移して、それからと云ふものは、兩家は最早利害觀念を度外視し、騎虎の勢で、明治卅九年の五月、兩派辯護士が調停の勞をとつて和解するに至る迄、係争を續けたのであつた。松本家が此訴訟費用に費した金額だけでも數萬圓に上つた。尙、東川家と示談の際に松本家から提供した諸物件中、當時六千圓と評價された山林は、數年の後東川家が他に三萬六千圓で賣却したものであつた。

田邊監獄の未決監に繋がれてゐた祖父は、間も無く青天白日の身となつて出獄したが、A叔父は懲役二年半の判決を受けたので、保釋中逃亡して仕舞つた。そして十餘年も逃げ了せて、遂々時效に依り入獄を免れたのであるが、夫れを書いて居れば、優に一冊の小説だから、こゝには省略する。

涙の母子

A叔父が枕木事件を惹起して以來、松本家の財産は、田畑が親戚の家へ抵當に入り、峰々谷々の山林には悲哀を帯びた丁々たる伐木の音が響き初め、松本家の倒壊は最早『時』の問題となつた。それでも松本家の體面だけは、下男が二人、雇女が四人、其れに臨時雇數人、祖父母や若い叔父叔母を併せて、マダ二十人近くの大家内であつた。

小間物問屋の愛娘として何不自由無く育つた身の、懐しい母兄妹と離れて山河幾

百里、遙々と南の國の而も淋しい山の中へ嫁いで來た僕の母。其母は、朝未明から雇女と一緒に起きて、支ふる事の出来ない既倒の大厦を、尙ほ細い女の腕一つで何とか出来ないものかと腕き苦んだ。けれども母も、所詮は弱き女性であつた。

青白い月光が脊戸の石垣に映つて、杜鵑が云ひ知れぬ胸の悲哀を誘ふ時、家人の寢静まるを待つて内密と起きた母は、行燈の火を搖き立て、駿河の祖母にあて、長い手紙を一行書いては泣き、二行書いてはシクシク泣いた。泣き乍ら何の苦勞も知らずに天使の様にスヤ／＼と睡眠つて居る僕達兄弟の寢顔を覗きこんでは、又もや泣くのであつた。はては悲しみが胸にこみ上げて來て、堪えられなくなつた母は、兄弟の眠むつて居る夜着の上によよと許り泣崩れた。

僅か七歳ではあつたが、家運の顛覆を、もう能うく知つてゐた僕は、其時蒲團の上不起直つて端然と座つたまゝ、『母ちゃんよ、母ちゃんよ』といつて泣いた。

謙治も眼を覺した。三郎も起きて來た。そして何とは無く悲しい情調に身を搾め

られ乍ら、母子四人は聲をあげて泣いたのであつた。其時母は僕達三人の兄弟をキチンと坐らして、

『母ちゃんはね、最う此のお家には御用の無い身體だけど、坊やが可愛ゆくて可愛ゆくて、どうしても、駿河のお祖母ちゃんのところへは歸れませんの、だから皆母アちゃん云ふ事をよく聞いて早く成長くなつて、偉い人になつて母ちゃんを喜ばして頂戴よ』と、訓戒して呉れた。夫れは母が、祖母の所から、見込が無いなら、歸れといふ手紙を幾度も／＼受取つてゐたからであつた。

『ウン、僕は成長くなつたら大學校を卒業して、大臣さんに成るんじや』と僕が涙を流し乍ら云ふと、謙治も負けぬ氣を出して大將になるんだと言ひ出した。とうとう僕達は夜の二時過ぎまで、大臣と大將との優劣を争つたので、母はいつの間にか心から可愛いといふ様な顔で、僕達兄弟を等分に見守つてゐた。

寺井先生の泣演説

明治三十二年四月から、僕は二十町程離れた隣字の湯之又にある村の小學校に通ひ初めた。學校に入る前に、母が夜仕事の暇々に假名など一通り教へて呉れて居たから、僕にとつて學校は非常に面白いものであつた。家で習字の稽古をする時母が手を取つて書方を示して呉れて居たから、習字のお清書は何時も「最良」許りで、赤い二重丸を一つばい附けて貰つては、持歸つて母を喜ばした。

しかし僕の性質は、段々荒つぽくなつて來た。金持ちの息子としての缺點を遺憾なく具備して居た。短氣で無鐵砲で、手足に生傷の絶え無い僕は、これが爲に何度母を泣かしたかも知れない。母は野猪の様な性格の僕の前途に就いて、優しい謙治と違つて眞個に心配して呉れた。僕の缺點を先生に告げて學校と家庭との協力で、此亂暴者の性格を矯めるのに日夜心を碎いて呉れたらしい。

遊びに行つて走つて歸つて來ると、いつも下駄や草履を三尺位つゝ東西に撥ね置いて、座敷へ飛上つた。

『眞一よ。下駄をキチンと揃へて脱ぐ人でなければ、逆も偉い人にはなれませんよ』と云つて、其度に母は履物を揃へて呉れた。

或時學校の修身の時間に寺井先生が「英雄と沈毅」と云ふ題で判り易く、其れとなく僕を教訓して呉れたのであつた。今日と云へども僕は下駄を脱いで座敷に上る時、度々此の先生と母との教訓を想ひ起す事がある。

雪の霏々たる或冬の日の午後であつた。學校から歸宅すると、

『お、寒かつたらうね』と、云つて母がお膳を圍爐裡の傍へ出して呉れたが、食膳の上に自分の好きな物が一つも無かつたので、つと立上つた僕は、突然足を舉げて膳を圍爐裡の中へ蹴込んだ。『お前はまあ……』と云つて母は泣倒れてしまつた。其翌日學校へ行くと放課の時『眞一！ 用事があるから残つて居いで』と、先生が云

つた。聽て先生は僕を教員室へ連れて行つて、修身の繪本を見せ乍ら嚙んで銜める様に、一々説いて聞かした。僕はしく／＼泣出した。其れは先生の教訓が身に沁みての優しい心根からでは無くて、前の日の一件を先生に告げた母の行爲が癢に觸つたからであつた。暫時の間僕が泣獻^{なげ}くつて居ると、『判つたかい、判つたらもう泣かなくて可い、是からお母さんの云ふ事をよくお聞きなさいよ、今日は是で可いからお歸りなさい』と、先生は云つた。僕は校門を出ると、村中響渡る様な大聲で、ワイー／＼と泣乍ら家へ歸つた。田畑に居る村人は、何事が起つたのか知らと云ふ顔つきで鍬の手を休めて打瞞つて居た。祖母や母や若い叔母達は、僕が怪我でもしたのだと思つて、驚いて門口迄走り迎へた。僕は何を云はれても、泪は一滴も流さないで唯聲許かりで、ワイー／＼泣いては母を手古摺らして居た。

寺井先生——後に僕の親戚へ養子に来て松本姓と變へた——は非常な熱情家で、先生の打振る鞭のさきから先生の血と涙と汗とが溶け流れて、生徒の胸の裡へ沁み

込んで行つた。だから先生に哺くまれた當時の生徒達は、向上の心が燃えにもえて居た。無論僕も其の一人であつた。

先生はよく教育幻燈會を開いて、小さい生徒達の精神修養に努力しては、國家觀念を熾烈に吹込んだ。楠正成が櫻井驛に正行と生別する畫面に就いて、先生が泣き乍ら説く忠孝の道に當時八つ九つの僕は、切齒扼腕して正成討死の當時に生を享けて居なかつた事を嘆いたものであつた。先生の演説する時は、熱心面に現はれて、いつも涙滂沱^{はうた}たる有様であつた。寺井先生の泣き演説として有名であつた。

卒業式の日には先生は定つて、

「諸君……此學校を卒へてからも、決して私の顔を汚すやうな事をして呉れるなよ……酒を飲むなよ、博奕をうつちやならんぞ……」

と、云つて、泣き乍ら訓戒した。卒業生のみならず、臨場の父兄迄もいつも其の演説には感泣したものであつた。

此先生と、心から僕の亂暴粗放な性格を嬌める事に注意を拂つた母とに育てられて行つたけれど、先天的の性格は其儘芽をふいて行つた。

明治三十四年の春、末弟勳が生れると前後して、謙治が新に小學校には入つて、兄弟の者は仲よく通學して居たが、或時謙治が兄の命令を遵奉せぬと云つて、猛烈に謙治を虐めた。『コレカラハニイサンノイフコトヲヨクキキマス』と紙に書かした上、鎌で指を切つて血印を押さした事もあつた。

母はよく持病の癩が起つて苦しんだ。

兄弟の者が學校から歸ると、弟は整然と自分の机の上に學校道具を置いて、看病の爲に母の枕元に坐つた。けれども不孝者の僕は本包みを母の枕邊に投出して、病める母に『お菓子頂戴』と強請んだ。弟の謙治は兄と違つて本當に優しくかつた。けれど兄の體中に燃ゆる潑刺頑強の血潮は、依然弟の脈管をも彩つて居た。一旦拗ね出したと云つたら挺でも動か無つた。その時分父は家に居なかつた。母はよく折檻

の爲に兄弟の者を米倉へ閉ぢ込めた。腕白者の兄は母に捕り相になると泣乍らも表へ一散に逃げ出したが、優しい従つて愚圖な弟は直に米倉に入れられた。すると兄は母に隠れて内密で弟を倉から出してやつて、伴だつて遊びに行つたのであつた。學校の遊仲間では無論僕が一方の旗頭で、Kと云ふ少年が一方の牛耳をとつて、二派相対抗した。Kの腕白と云つたら猛烈で、流石の僕も一等を輸して居た。何度も何度も喧嘩をしては負かされ、筆や紙などを提供して、屈辱的媾和を結んで居た。負け嫌な僕は尋常科を終へる四年の間、常に復讐の刃を磨いて機を覗つたが、遂々其儘に卒業して、其れから田邊の高等小學校へ入つて夏休みに歸つた時、遂に大喧嘩を初めて其時思ふさま復讐した。僕に組しかれたKは其時大聲を上げて泣出したら、類さんと云ふ村の青年が走つて來て分けて呉れた。其後更にKも僕の外出を覗つて居たが、僕は容易に家から外へ出ず、間もなく田邊へ行つたから無事に済んだ。Kは頗る頭腦の明晰な男で、今日猶僕と相協力して向上の途を歩んで居る。

兄弟の學校に於ける成績は、弟は常も一番であつたけれども、兄は各學科が全部「最良」であつた代り、品行點が「可」で二番より上に上れなかつた。母が僕に「弟に負けてアカンのね」と、何かにつけて勵まして呉れたけれど、遂々三番で明治三十六年の三月、村の小學校を卒業した。

巢立ち

僕が十二の春三月、村の尋常小學校を卒業すると、隣郡田邊の町の高等小學校へ入る爲に、父に連れられて故郷を去る事となつた。出發の前日、寺井先生の所へ暇乞に行くと、先生は餞別を呉れて懇々と將來を訓戒して呉れた。其晩母も松本家の將來の事やら衛生の事、何や彼やと細々注意したあとで、死んでも母の顔に泥を塗つて呉るな、と附加つけくはへた。

翌朝五時頃、母は末の弟の勳を負うて橋の袂迄見送つてくれた。四里の路を日高

川に沿うて下り、四里の險路虎ヶ峰を越して、田邊の町へ入つたのは、其日の夕方七時過ぎであつた。

中屋敷町の父の妾宅に着くと、奥から小母が二人の子供を——僕に取つて腹異はらちがひの弟妹——連れて、女中と共に玄關まで迎へに出た。

僕が小母の前に手を衝いて、母に教はつた通り挨拶すると、小母は目を圓くして、「まあ本當に眞一さんは變つたのし、生長かひになると此様こんなに温順おとなしくなるもんか知ら御坊の町に居る時、妾めたいは随分眞ちゃんに困らせられたよ、すると富美郎も今に生長かひになると少しは温順おとなしくなるだらうね」と、しんみりと云つて居た。僕は心の中で「は、あ小母は僕が猫を被かつて居るのを知らないね」と、思つた。

田邊の高等小學校へ通つて居る滿二年間は、僕の歴史に頗る不面目な頁を殘すに過ぎなかつた。

何だか食客の様な氣持で、遠慮して小さくなつて暮した。小母は藝者上りの無教

育者であつたけれど、よく口癖に「妾めかけの小さい時は繼母まははにかゝつて……」と云つて、其様に僕を虐待はせなんだが、父に爲にならない、と云つて、女中は三人も居たけれど、僕に庭を掃はかしたり、玄關を洗はせたり、諸所に使にやつたりした。母の膝元もとに居る時は、如何どう様に母が泣口説いても母の命令いじけを聞か無かつた僕は、小母の傍では羊の様に従順で小母の命令に従つた。今から考へると矢張爲になつたんだらうと思つて居る。父は大方田邊へ来て居て、家運は到底も既往とてに回へすことの出来ぬ程に沈みつゝあるのに、日夜小母と共に歡樂に耽つては、*Love*な生活を續けた。京都の高島屋から態々番頭を呼んで、其頃八十圓もする着物を、三つになる延子に作つてやつて、近所の人に後指をさゝるのにも拘らず見せに連れ歩いた事もあつた。小母と一所に大阪へ遊びに行つて、何千圓もする緞帳どんちやうを有名な大阪俳優某に贈つたのも此頃であつた。(僕は斯云ふ父の所行に筆を及ぼす事を苦しいとは思ふが、己むを得ない。)

大阪相撲の地方巡業團を家へ招待して、町の藝者を總上げにして、一晚中騒いだのも此頃であつた。

かゝる中、松本家の没落の實證が目の前に現はるゝ事が度々ある様になつた。女中が三人から一人になつた。父が別宅を抵當に金銭を借りて居る柿山と云ふ高利貸アライが時々乗込んで來た事もあつた。僕が二十錢の授業料を父に下さいと云つた時、父は一文も無くて困つた様な顔をした事もあつた。

此様な現況ありさまとなつて來たから、愈々僕は寺井先生や母がよく云ふて聞かせて呉れた「苦學」を覺悟する様になつた。そして口に出しては父にそれをよく云つた。或時寢物語りに父が小母に、

「眞一はあれで仲々早熟まぜた事を云ふよ、苦學しても立派な人間になると云つて居る」と話すと、

「誰かに聞いて其様な事一寸云うて見るんやな」と、小母は答へた。

田邊の小學へ通ひ初めて早くも半年の歳月は流れたが、亂雑と無節制の氛圍氣中にあつて、何時の間にか先生と母の教訓を忘れて僕は、いつしか不良少年となつて、悪少年と遊び歩いた。夜分隊を組んで町を歩き乍ら、内密と乾物屋の店頭からイリナゴの一握みを掻渡つた事もあつた。メンコ勝負に敗けて、何百枚と云ふ借が出来て、實家の母の元へ逃げ返へらうとして、途中で捕へられ連戻された事もあつた。(此メンコの相手は中佐の倅で今は農學士として、濟し込んで居る)。中學生の間に催眠術が流行つて、偽つてかゝつてやつては何も知らぬ中學生達に散財させて、知らぬ顔した事もあつた。これ等の行爲は生來の腕白性に基因するし、また家庭の罪でもある。

明治三十七年の二月は日露戰爭の始つた時で、小學校前の牟婁新報社揭示場に、

「仁川沖のコーレッツ、ワリヤクー二艦撃沈」と大書して帳出すと、不良少年は掻渡ひとメンコ勝負を止めて少年樂隊を組織し、得利寺の大捷や遼東半島占領の報知ある度毎に町の祝賀行列と共に笛と太鼓と鐘を持つて町を練歩いた。

鈴ちゃん

大正六年九月東京帝大法科へ入學した僕は、毎日大學圖書館に籠つて七面倒な法律書を纏いて居たが、或日勉強に疲れた儘に新聞縦覽室に入つて、何心なく讀賣新聞の前に立つと、「舊野球撰手ロマンス」の題下のもとに、舊早大野球部の有名な投手であつた小林君の優しい結婚ロマンスが、流暢な筆でものされて居た。其のヒロインが思掛なく僕の幼な友達の鈴ちゃんであつたので、僕は限りなく其當時を懐かしんだのであつた。

田邊別宅の隣家に黒井さんと云ふお家が在つた。黒井家は代々舊田邊藩士の家柄で、主人愛太郎氏は稅務署か何處かに出勤して居られたと記憶する。好人達揃のお家で、奥さんも御主人に劣らぬ優しい方であつた。黒井家と僕の家とは垣根一つ

隔て、お互に心安う交際して居た。

黒井さんのお家に二人の嬢ちやんが居た。姉さんを鈴ちやんと云つて、確か僕より二つ下の其頃十か十一位であつたらう。鈴ちやんの其名が既に、天使の様に無邪氣な可愛らしい美少女を想起せしめる通りに、すらつとした姿、お下げにした真黒い髪、白い顔、涼しい眼は申分無い程美の調和を得て居た。

隣同志の心安さに僕等はよく門口で一緒になつて遊んだ。其れを僕の學友たちが淡い嫉妬の眼を以て見て居る事を、山出しの腕白少年は、自分自身何等疾しい點が無かつたから少しも氣が着かなかつた。

或日學校へ行くと、誰が書いたのか僕の机の上に白墨で、「きんれい」と書いてあつた。僕が其の意味を考へ乍ら拭いて居ると、四五人の同級の連中がクス／＼笑ひ出した。

「きんれい、つて何や、さつぱりわからへん」と僕が言ふと、

「きんれい、きんれい」と口々に唱へ乍ら、皆なはアハ、と手を打つて囃した。

「男らしい云ふもんや」今にも飛付き相な恰好で、僕がぐつと睨むと、ばた／＼と運動場へ出て「金令、金令」と又もや囃し立てた。其れから毎日の様に僕の机の上には、「きんれい」と書かれてあつた。僕は何の事やら少しも解せ無かつたから、不審に打たれ乍らも黙つて消して居た。すると或夕方、家の門口で弟の富美郎と隣家の鈴ちやんや其の妹さんの董ちやんと四五人で遊んで居ると、通り掛つた四五人の學友連が二十間許通過ぎてから。

「やーい、やーい、お可笑しいな、又金令と遊んで居らあー」と喚いた。

きんれいの意味が辛つと判ると、其れが全く思掛けない事だつたので、僕は眞赤になつて、

「なんじや、おのれツ……」と、奮迅の勢で追掛けたら、腕白坊達は蜘蛛の子を散らす様に逃げて走つて行つた。其翌日學校の運動場で僕が、四五人を相手に組打ち

の大喧嘩を始めてから、間も無く皆は『きんれい』と囃さ無くなつた。同時に僕は鈴ちやんと一切遊ばない事にした。或時垣根の向ふで何も知らぬ無邪氣な鈴ちやんが、『眞ちやん』と呼び掛けて來たから、黙つて白い眼でグツト睨みつけると鈴ちやんは吃驚して泣出しさうな顔をして居た。思へば十七年の昔である。小村鈴子令夫人の多幸を心から祈り乍らペンを擱く。

田邊中學校の退校命令

田邊高等小學時代の僕の學業成績は、無論優秀であらう筈が無い。明治卅七年三月の進級試験は中位の成績で、成績表を父に示すと、父は小母の手前もあつたからであらう、メンコ事件などを言ひ出して僕をこつびどく罵つた。僕は晝近くなつて床を離れた父が、井戸傍で顔を洗つて居る所へ追掛けて行つて、土下坐して泣き詫乍ら次學年度の優等進級を誓約した。

此感激の續いて居る間は僕もすつかり、母の膝下に在つて湯之又小學校へ通つた時の様に、眞面目に、不良性の行爲を慎んで勉強して居たが、二三ヶ月たつと又もや慊らない家庭の空氣から逃れて、外へ遊びに出勝ちに、もとの不良少年の仲間入りをする様になつて、随分亂暴な事ばかりしてゐた。しかし僕が其の翌年高等科二年級を終了した、試験成績の發表のあつた日、學校の掲示場へ行つて見ると、思掛なう僕は優等生の仲間入りをして居た。僕は堪ら無く喜悅を感じ乍らも、平素僕の一身を心配して呉れて居た校長森松次郎先生と、受持教員福田重作先生のお蔭を感謝した。森先生は廿五年も田邊高等小學校の校を勤めた有徳の仁で、父とも知合であつたから、よく僕の家へ遊びに來ては、福田先生と共に力を合せて僕の將來を慮つて呉れて居たのであつた。高等科二年を終へた僕は十四の春四月、直に田邊中學校へ入學したから、父の末弟——文雄叔父と一緒に中學へ通ふやうになつた。此頃から愈々別宅を借金の抵當に取らるゝ事と定つたので、小母は遂に父と相談して、

二人の兒を連れて大阪の親戚へ引上げて行く事になつた。父は同時に商用を帯びて御坊の町へ行つて、其處でも日夜饗宴に耽つた。此事を漏れ聞いた僕は、毎朝出校前に父に宛て一本宛重盛もどきに諫言の手紙を送つて居たら、什舞には封も切らずに、「親に向つてあんな事を云つてはいけない」と云ふ手紙を添えて突返して來た。

小母が大阪へ去り父が御坊に最後の耽溺を試みて居る時に、田邊の別宅には、文雄叔父と僕と女中と、家計整理の爲に出て來た祖父とが、留守居的に居た。初夏の和かな涼しい風がセルの單衣の袖を吹く頃、山路奥の實家から勳を連れて母と謙治とが、相前後して町へ出て來た。

其年の四月に村の尋常小學校を卒へたが、御坊の千村義叔父から、高等小學へ通はしてやるから來いと行つて來たので出て來たのであつた。相不變優しい子で彼方此方で貰つて來た七十錢餘りの小遣錢の中から、半分僕に呉れた。汽船で御坊へ向け出發する間際、兄弟の者は扇ヶ濱の松の根方に腰打掛けて、種々悲しい現在から

楽しい未來を語り合つた。弟に小遣を貰つても、矢張り頭腦は僕が兄であつたから、謙治の將來を激勵して、二人が心を合せて、松本家の恢復を計らうと云ふ事を誓約した。

謙治が御坊に去ると、間もなく母も六つになる末弟の勳を連れて、保養の爲に久し振りで田邊へ出て來て、町から三里離れた椿温泉へ入湯に出懸けた。

袖に泪の注がる様になつて始めて、本當に松本家の窮狀に同情して呉れる人達は、松本家が孤城落日の姿になつても尙ほ出入して呉れた。二年程別宅の方へ上女中として來て居たお曾世さんは、よく僕を可愛がつて呉れて、「眞ちゃん、早く偉くなつてお母さんを大切に上げてなさいよ」と云つた。僕の別宅から暇を取つて、南富田村の實家へ歸つて居る時、態々一面識も無い母を椿温泉に訪ねて行つて、種々母の面倒を見て呉れたりした。

椿温泉に二ヶ月程滞在した母達の費用は、皆祖父から送つて呉れた。祖父は飽ま

で温厚篤實の君子で、松本家に於ける孤立無援な、淋しい母の唯一の味方であつた。祖父は母の心をよく知つて居た。母に種々父の不始末を詫しては「つらからうが何卒辛抱して呉れよ」と頼んだ事もあつた。

母が椿温泉から田邊へ歸へると僕の暑中休暇となつたので、母と僕と勤とは御坊の千村の義理ある叔父の家に遊びに行つた。祖父は別宅を債權者に引渡して郷里へ引上げた。愈々松本家の没落は現證されて來たが、貧乏になつて僕が中學から退く様になつても父が實家へ歸宅つて、母や僕達と睦しく暮して呉れる様になつたら、如何に幸福だらうと僕は子供心にも考へて居た。

千村の家内達は、皆親切に母子を世話して呉れたけれど、母は何と無く配所の人の様に遠慮勝ちで、僕は母の淋し相な様子と、晴々とした一家の人達と見競へて、「今に母を幸福にして、親類中に羨望させてやる」と、固い反抗的決心が心中に湧いて居た。

此頃叔父はまだ町長の劇職に就いたり、種々な公共事業に携はつて居なかつたから、御坊少年團と云ふ様なものを設けて、近所の少年達を集めて薰陶して居た。叔父の家の裏庭に池があつて、背戸を流るゝ小川から水が通じて居て、數十羽の鴨や家鶏が放たれて居、鰻や鯰も澤山居た。少年團員達は暇さへあれば其處で釣をした。或時弟と物置の傍で立話をして居ると、五六羽の「ひよつこ」の中に、口に五六寸程の釣糸を引いて居る一羽を發見して、兄弟は急いで其「ひよつこ」を引捕へて口から糸を切斷つてやつた。多分團員の誰か、餌の附着いた儘釣針を置いたのを喰つたらしかつた。四五日経つと不意に叔父は、團員及び女中一同を一室に集めて宣言した。

「今日私が家雞に餌を與りに行くと、一羽の「ひよつこ」が雞屋の入口で首を奥向けにして死んで居た。私はどうも其れは誰か、誤つて踏殺すか如何かして隠す爲に雞屋の中へ入れたとしか思へない。其れで誰か覺えのある者は、決して叱らないか

ら正直に云つて欲しい』

團員や女中達は、誰も叔父の間に答へようとはしなかつた。そして實際誰も知らないらしかつた。とう／＼一人々々叔父の前に呼出されて、取調べらるゝ事になつた。僕は後の方に小さくなつて座つて居る弟の謙治を一寸睨んで、眼で何も云ふなと知らした。けれど叔父の眼は鋭どかつた。早くも僕に眼を着けて居るらしかつた。僕は前の日の出来事を明らかに云つて仕舞へば、何でも無い事を知つて居たが、一旦事實を云つて、僕達の唯一の娯樂である釣を禁せらるゝ事があつては……と思つて、一切何も云は無い事に覺悟して居たのであつた。僕と違つて優しい謙治は非常に悄氣込んでゐた。

取調べの最後に僕と謙治とが残つた。叔父は僕を呼出す前に一同に、

「皆、盗人猛々しいと云ふ事を知つて居るかね？」と聞いた。僕は言下に、

「其れは盗人が自分のした悪事を悟られまいとする爲に、故意と種々な事をしてたり

云つたりする事です」と、答へ乍ら、「ハ、ア、叔父は最う何も彼も知つて居るな』

と、心に思つた。そして僕と謙治は手酷しく調べられたが、兄弟とも知らぬ存せぬで押通したから、叔父も母の手前があつたからであらう、とう／＼我を折つて仕舞つた。お蔭で少年團員は其後も池で釣をする事が出来た。

八月の終りになつてから、僕は母より一足先に親類の寺野の小父さんに連れられて、十五里の山路を日高川に沿うて廻つた。間も無く母も動を連れて歸つた。僕の夏期休暇も盡きて九月も中旬に入つたが、田邊の別宅が人手に渡つたので、中學校に通學するに今迄通りの學資では續けられないから、其儘實家に留つて居た、中學校の保證人からは盛んに出校を促して來た。

或日祖父は僕を呼んで「お前も知つて居る通り、實家が此様現況になつたので、此儘ではお前を引續いて中學校へ通はず見込が立たない。其れで來春になれば、文雄も卒業するし、其迄には家政の整理も着かうから、其れまで中學へ行く事はお待

ち」と云つた。

其頃は、もう松本家も執達吏に何度もお見舞を受けたので、掛軸や箆笥や什器や果は長押に掛つた槍に迄、家運を奈落に導く紙がベタ／＼張られてあつた。十一月になつて中學校から通知が來たから、何事か知らと開いて見ると、授業料二ヶ月分の滞納に原因する退校命令書であつた。

半身不隨

僕が十四の暮であつた。大阪に居る父から、久し振りに送つて來た一通の手紙は、松本家の人達に對して更に新しい脅威を齎らした。其時、父は東川氏との訴訟事件の爲に大阪に出張してたのであるが、脊髄炎に罹つて、運動神経を麻痺せしめた結果、下半身不隨となつたとの通知であつた。

祖父は家族の者を奥の居間に呼集めて、憂はしげに父から來た手紙を一通り讀ん

で聞かせた。祖母は目に涙を一杯溜めて凝乎と膝頭を見詰めて居た。母が涙を拭き拭き臺所の方へ行つた後で、祖父は父の手紙をくる／＼と捲き收め乍ら、

「金錢の冥加が盡きて罰が當つたんだ。けれど嫁が可哀相だなあ——」と、暗然として祖母に云つた。六十過ぎた祖母は黙つた儘ボロ／＼涙を膝の上に落して居た。

四五日經過つと、父から第二信が届いた。そして間も無く父は大阪から汽船で田邊へ上陸して、其處から駕籠で連歸られた。父の意識は判然として居たが、下部半身は全く不隨で、二本の手を衝き／＼蹙り歩く様を見た時、僕は田邊に於ける、豪奢であつた過去の生活を想ひ浮べて、言ひ知れない憫れさを感じた。夫れと共に、母を疎にしてゐた父を看病する母に、满腔の同情を拂つた。

實家で一月許り療養した父は、隣郡にある湯の峰温泉に湯治に行く事となつた。母は家庭の都合でどうしても附添うて行く事が出来無かつたので、近所の男が母の代りに行つて呉れた。

落日の悲哀

父の兄弟が揃ひも揃つて家産蕩盡中に、松本家倒壊の致命傷である枕木事件が突如として湧起つて、東川家との係争が殆んど十年に亘り、其莫大な訴訟費に疲れ切つてゐた松本家は、更に父が斯る難病を得るに至つて、最早再び起つ事の出来ない程、惨憺たる沈落を追ひ進むで行つた。

「松本のお祖父さん」と云へば、三歳兒も其徳を慕つた程、徳望郷黨を蓋うた祖父も、斯くも急轉直下する悲惨な現實曝露に、憂悶の極、夜の一時二時迄寢られぬ儘に大阪や東京の新聞を繰繰げ乍ら、

「どうなるんだろ、噫、一體どうなるんだろ」と云つて、納戸なんどに寢て居る僕達の夢を破つた事も度々であつた。

動産不動産は、競賣に競賣が続いて二束三文に叩き賣られるやうになつた時、僕

には世の中の人情と云ふものが、緑と灰の二色に判然はつきりと區劃せられ得る様に思はれて來た。僕等兄弟に向つて、『何不自由なく育つた坊等が可哀相だ』とか、『老先短い老人夫婦が氣の毒だ』とか云つては、松本家の衰運を同情して呉れて、『偉くなれ、偉くなつて松本家を盛返もりかへして、お母さんを大切にしてお上げ』と激勵して呉れる人達に對して僕は、縋り付いて行き度かつた。松本家が堂々たる家運を張つて居る時、僕等たちを『坊んち、坊んち』とチャホヤして置き乍ら、衰微すると掌を覆すやうに、途中で出遇つてもケロリとして、見向きもせぬ人達に對して『おのれ、今に見て居れ』と小さい弱い心に復讐を誓つた事もあつた。

母の教訓

家屋敷田畑迄も二重抵當には入つた。松本家の慘憺たる滅亡が迫つて來た時、此の悲境に在つて、相變らずの大家内の裡に日夜煩務に忙殺せられ乍らも、僕達の教

養を片時も怠ら無つたのは母であつた。僕が七つ八つの頃眞夜中に、僕達を床の上に坐らして泣き乍ら教訓した母は、最う此頃は涙の泉が枯渴してゐたのか、一滴の涙も示さずに、凛々しく立働いてゐた。

長弟の謙治は、御坊の千村の叔母の處に厄介になつて居るので留守だつたが、十四の僕と九歳の三郎とは、相携へて家運の挽回に努力しようといふ事を誓約して、此事を御坊の謙治の所へ報知しらせたりする様になつた。

母は夜遅く迄近所の人の着物を縫つたり、レース糸で種々な細工物を造つて、川稼ぎの日傭職人達に十錢二十錢に賣つては、其のお金で東京から種々な雑誌や、成功美談書や立志小説の類を取寄せて、兄弟達に別ち與へて呉れた。母の教訓と、孤城落日の松本家に對する世人の態度とは、尠なからず僕の向上心を煽り立てた。

明治三十九年の春を迎へて僕は十五となつた。愈々出京して苦學すると決心して、祖父や母に隠れては小遣の許す限り、東京から苦學案内の様な雜書を何種も取寄せ

て、日夜出京の上の苦學方法を思煩おもひますつた。或時例のやうに東京新聞の廣告欄に眼を配つて居ると、神田の青年同志舎の苦學生募集廣告が目について、早速規則書を取寄せて見ると、三十何年創立とか何とか冒頭に掲げて、功名心に燃ゆる何も知らぬ田舎の少年の出京熱を煽るに充分な文句が、書連ねてあつた。大早の雲霓を望んで居た僕は、此れこそ僕の行くべき處だと、規則書を母に見せて母に賛成を求めた。母は、

「左様ね……………」と言つたぎり頭を傾かたげて、二つ返事を期待した僕に案外な思をさせて居た。母は常に松本家が斯うなつて來ては、子供達をこんな所へ置いては、迎も家運の回復は思ひも寄らぬから、何時かは順々に世の荒浪に放り出して、其中一人でも立派な人物が出来上れば可いと覺悟して居たらしいが、さて、「僕を東京へやつて下さい」と、子供から切り出されては、矢張り僕を手放す事に躊躇した。僕が再三強請すると、或夜母は僕を連れて松本先生——舊性寺井——の處へ相談に行

つた。青年同志舎の規則書を仔細に見て居る先生の顔を、母を覗き込み乍ら、

『其所は確實な所でせうかね』と尋ねた。

『此舎は眞個に國家社會の爲に、苦學生を養成する所かも知れませんが』と松本先生は幾分乘氣の様であつたが、母は、流石に未だ同志舎を信じて居無いらしく、先生といろく相談した末、

『いつその事、沖野さんにお世話を願つて、神學校とやらへ入れて貰つたらどうでせう』と云出した。

『宗教學校は嫌です』と、僕は此様コマシヤクレた事を云つて、一も二も無く母の提言を否定した。沖野氏は沖野岩三郎氏で、現に芝公園傍の統一教會を牧して居る仁である。

何處へ行にせよ、家を宰する祖父の許可を得なくつてはならないから、或日居間で調べ物をして居る祖父の傍へ行つて、同志舎の規則書を見せ乍ら、出京の事を相

談した。

『お祖父さん、私は東京へ行つて、苦學して一人前の人間となつて、家を再興するんじやさかい、東京へやつて呉れんかい？』

祖父は眼鏡越しに規則書を一寸見て首を横に振つた。

『阿呆な事云ふもんじやない。有餘る程學資があつても、勉強して立派な人間になる者はホンの數へる程しか無いものじや、夫れじやのにお前の様な子供が、東京で苦學して出世せうなんて無茶な事、其のうち、お父さんの病氣も治つて來たら、お前を又中學へ通はしてあげるから、まあく温順しくそれ迄待つとらんせ』

『お祖父さん、お醫者さんは、お父さんの病氣は逆も最う全快ぬと云ふし、幾ら待つたつて此様に家がなつたら中學校へなんか行かれんがなあ、どうぞ東京へ遣つてお呉れよ、若し苦學出來なんだら私は奉公でも何でもして立派な人間になるさかいの。』

祖父は黙つて算盤を弾き掛けた。

「喃う、喃う、お祖父さん」僕は執拗に返事を催促した。

「其様に諄い事云ふもんじやない、大人の云ふ事は善く聞くものじやよ、まあく最う暫くの間待つて居な」

僕は悄然として祖父の居間から出て來た。其れから折に觸れては祖父に此事を願つたが、勿論許さるべき筋合のものでは無つた。終には祖父から、「お前も聞分の無い子じや」と、叱られる様になつた。で愈々最後の手段に訴へる覺悟を定めて、或晩に内密と針仕事をして居る母の傍へやつて行つて

「お母アさん、私は何遍お祖父さんに頼んでも、東京へ行く事を聞いて呉れぬさかい、私は逃げて行かうと思ふんぢや、で、お母アさんにお願があるが聞いてお呉れよ」
「願ひとは何です」母は、針を運ぶ手を止めて、凝乎と僕の顔を見た。

「私に東京へ行く旅費をお呉れ」

「其れはお前が本當に心から東京へ行つて、苦學して立身する決心なら、お母アさんは旅費位こしらへて上げますけれど……じやまあ先生と相談して見ませう」
母が何と返事するか知らんと心配して居た僕は、案外に話がすらすらと運んで行きさうなので堪らなく嬉しかつた。無論母から相談を受けた松本先生は、僕の行動に双手を舉げて賛成したのであつた。

脱 走

母に旅費を保障せられ、松本先生に激勵の辭を浴びた僕は、日夜脱走の機を覗つて居たが、天は遂に求めて歇まざる者に好個の機會を與へた。其れは三里程川下の東の新宅と云ふ親戚の小父が亡くなつたので、二月五日に法事をするると云ふ通知の來た事であつた。ところが男としては松本家に祖父しか在宅して居なかつたので、僕が一家を代表して此の法事へ行く事と決定した。

僕は小さい胸に躍る希望を秘めて、書齋を整理して居ると、母が一寸来いと云つて僕を其の居間に呼んだ。

「眞一、如何してもお前東京へ行く氣だね？」と、母は僕の決心を確めた。

「無論ですよお母アさん、どうしても行きますよ。そして、私屹度偉い人に成つて見せるから待つて居てお呉れよ」

「けれど旅へ出ると随分悲しい事や辛い事がありますよ、貧乏になつてもお母アさんの傍に居た方がどの位幸福か知れませんかよ」

母は種々言葉を變へる僕の決心の臍を探るらしかった。僕は母に「假令石を嚙つても屹度成功して見せる」と云ひきつたので、母はやつと安心したと云ふ風に、

「其れではお母アさんが旅費を調達して上げませう」と云ひ乍ら、駿河の國から松本家へ嫁いで来る時、里親になつて呉れた初鹿野の小母さんに宛てた手紙を針箱の引出しから出して、

「この手紙を持つて行つてお峰さんにお渡し、そしたらお峰さんがお母さんの着物を出して呉れるから、其れを廣澤屋のお冬さん處へ持つて行らつしやい、お冬さんには何もかも話してあるから」と、僕に渡してくれた。

何度もく執達吏に見舞はれるので、母は自分の衣類調度を初鹿野の家へ預けて置いたのであつた。忘れもせぬ明治卅九年二月四日、母の注意もあつたので、誰にも感づかれない様に、僕は未刻過に内密と家を出て、ヒュー／＼と肌劈く朔風に、まん丸く身を疎めながら、手紙と風呂敷を胸に抱いたまゝ、田圃の畔足を飛んで行つた。

初鹿野へ行くと直ぐに、お峰さんは直ぐ母の着物を出して呉れた。其の着物は實に母が結婚の時着た、一襲ねの紋付と長襦袢であつた。僕は直ぐ其れを廣澤屋のお冬さんの家へ持つて行くと、五圓札を三枚渡して呉れた。

其夜母と一緒に先生を訪ねると、先生は種々就學上の注意や覺悟を説き聞かせて呉れた後、一枚の紙片かみきれに、汽車汽船の乗降注意や人力車の切符制度の事や、東京に着いて神田の青年同志會へ訪ねて行くまでの途筋の事など、細々と書き記してくれた。

先生の家から歸へると、小さい胴巻を母が縫つて呉れて、其中へ十五圓の札と先生から貰つた饒別にぎはなとを入れた。外に自分で貯めて居た銅貨を三圓程ハンケチにくるんで、雜囊の中へ入れた。其夜遅く迄御坊の千村の家に居る謙治に宛て、手紙を書いて志を立て、故郷を脱走するに到れる理由を述べ、終りに先生や母に訓戒され激勵せられた文句を其儘、謙治にも傳へたのであつた。

明治三十九年二月五日、愈々脱走の機は迫つた。で、そつと次第の三郎と未弟の勳いさなと呼んで、謙治に云つてやつた様な事を説いたが、何も知らぬ二人の弟は可愛い顔をして黙つて僕の云ふ事を聞いて居た。

朝飯が済むと祖父は佛前に供へる品物を僕に渡して、種々新宅しんたくの人達への傳言をした。折柄同行を約してあつた隠居いんきょの小母さんが迎へに来てくれた。雨模様で母の洋傘かうり傘を借りて行く事にした。母と僕と二人のみの知つてゐる大きな企てを、家内の者に覺られまいと思つたのであらう。

『それでは行つておいで、新宅の皆さんに宜しう』と、云つた限り母は逃げるやうに自分の居間へ走つて行つた。其時三郎はもう學校へ行つて家には居なかつた。僕は門口迄隨まいて來た勳を抱だき上げてやると、何時迄も抱だかれて居たがつて閉口した。隠居の小母さんと田圃の畔道を歩きながら、最一度家の方を振返つて見ると、祖父が門口に立つて僕達の後を見送つて居た。

橋を渡つて、寺野といふ前まで來た時、僕は大きな聲で、

『小母さーん、寺野の小母さあんと呼んだ。すると小母さんは垣の所へ顔を出して、

「真ちゃん、最う行くんかい、新宅へ行つたら皆に宜しう云うてお呉れ、どうせ今晚は新宅宿りで歸りは明日じやの」と云ひながら空を見上げた。

「小母さん、其れぢや行つて來うない、其れじや行つて來うない」と、繰返して云ふと、

「好う行つて居いで」と答へた。

隠居の小母と『せんご』といふ山越しの近路を取つて、新宅へ行つてみると、もう多勢の人が集つてゐた。

二月六日——朝起きると雨であつた。假令槍が降つても火が降つても、此機會を逸してどうなるものかと思つた僕は、

「此様な雨降りに逆も歸れるもんじやないさかいの、まあく悠然遊んで天氣になつてから往なんせよ」と口々に斯う云つて親切に引止めて呉れるのを、無理に斥け

て、僕は門田に注ぐ雨の足を見ながら草鞋を穿いた。雨天の爲に歸途を延引して居る小園の小父は「菓子でも買つて食べしやんせよ」と云つて二十錢銀貨を紙にくるくと包んで呉れた。

「有難うございました。左様なら………」と云つた僕は、びしや／＼と小石の流るゝやうな大雨を冒して、田邊街道を、川下の方へ後をも見ずに、ヒタ走りに走つた。

水
萍
行

水萍行

虎ヶ峯

猛雨を衝いて、ビシヨ濡れになつて走つた脱走少年が、虎ヶ峯の麓に差懸つた頃には、雨は小降りとなつて居たが、人通りは全く途絶えて、暗い雨雲の垂れた、深い山の中の獨旅がつく／＼と淋しくなつて來た。

何百年と云ふ長い間に山の幽邃が生んだいろ／＼の物凄い傳説が、何時の間にか胸に浮んで來て、果は、出發する一月程前に、山中に縊死者があつて、其吊下つた死骸の下に狼の足跡が澤山あつたと云ふやうな、村人の話すらも想出だされた。

僕は三歩行つては後から道伴の來るのを待つた。五歩歩んでは彼方の老杉の生茂つた峰を打眺めた。はては何となう恐ろしくなつて、

「お母さん……お母さん……」と大きな聲で呼んで見た。しかし答ふるものは山彦ばかりであつた。

名も知らぬ鳥が氣味悪く鳴いた。風の吹く度にキ／＼と木々の枝の擦合ふ響が無氣味であつた。段々と谷川の流れの音が遠ざかつて來る程、自分は未知の世界へ踏込んで行くやうに思はれた。

「お母さん……お母さん……」と、最一度母を呼んで見た。暫くすると、實家を出る前夜に松本先生と母から泌み／＼と教訓せられた事を考へてゐるうちに、

「左様だ！ 私は狼に喰はれたつて實家へ歸れるんじゃないのだ、此の山を越され無い様な臆病者に苦學など出来る筈はない！」と、僕は自分を叱つてみた。其れでも足は何となく逡巡がちであつた。すると何處からか、微かにホンの微かに人の咳拂ひが針の様に鋭くなつて居た僕の聽神經に響いて來た。

立止つて凝乎と耳を澄すと、彼方の峰を確かに誰か登つて居る様な氣配がした。

僕は夢中になつて、一つの丘を走り回ると、其所には打開けた眺めの谷間があつた。其處から數十町も離れた山腹を仰ぎ見ると、檜林の樹の間をチラ／＼と見え隠れに二人の荷持男が登つてゐた。其れを見確めた瞬間、僕は小躍りし乍らひた走りに其後を追うて走つた。

半時間程するとやつと追付いて見ると、荷持男の一人は「金藏さん」と云つて僕の家の盛んな頃始終出入した乾魚賣であつた。

金藏さんは「ハア／＼と息を切らし乍ら走り上つて来た僕を振り返つて見て、吃驚したらしく、

「やお松本の眞一さんぢや無いかい、お前様まあ獨りで何處へ行くのやのい」

「私、御坊の叔母さん處へ行くのや」

「ようまあ獨りで出て來られたもんやのい」

「だつて私、最う十五じやないかい」

「お前様今朝猛烈らう雨が降つて居たやのに、ようまあお母アさん出して呉たのい」

「いゝんや、昨日私は東の新宅の法事へ來たんやで、今日は新宅からや」

「さうかのし、家のお父さん御病氣如何やい、お母アさんも達者で居てへんすか」

金藏さんと此様な會話を交はして居るうちに、知らぬ間に足は運んで峠へと登り着いた。峠には、此の山中に唯つた一軒の茶屋があつた。僕は、婆さんの出された番茶で咽喉を濕ほすと、つと火鉢の傍を離れて、茶屋の傍に天を摩して居る杉の大木の根に立つた時、

「偉うなつて歸つて來るさかい、お祖父さんもお祖母さんもお母さんも皆達者で待つて居てお呉れよ」と、心の中で叫んだ僕は、ハラ／＼と涙を流し乍ら故郷の方へ向つて手を合せた。

雨は全然晴れて、山又山の十數里彼方には水天髣髴とした熊野灘が青く見えた。

米國通ひの汽船でもあらう？ 黒い船が一隻細い黒煙を吐きながら東の方へ動いて居た。

最う路は下り阪であつた。僕は「男子立志出郷關、學若不成死不歸」の詩を何度も／＼小聲で吟じながら山を降つた。

虎ヶ峰の麓にある「大當」の茶屋で暫く休んで、秋津府まで来た時は、まう短い冬の日脚は山の端に隠れて、夕靄に包まれた田邊の町がチラ／＼燈火を輝かせながら黒くなつて横はつて居るのが見えた。

「真一ちゃん、最う此處迄来たら田邊へ着いたも同じじやさかい、私の家で一休みしてお出でや」と、金藏さんが親切に勧めて呉れたので僕は、街道の上の金藏さんの家の上つて行くと、

「これ、松本の坊んちや」と家内の人達に紹介して呉れると、

「さうかい、其りやまあ、ようこそ」と云つて、大變親切に待遇して呉れた。一時

間許り休まして貰うと足の痛みも餘程薄らいだので、家人に厚く禮を述べて、田邊の町に入つた。

町に入つた僕は何處へ一夜の宿を求め様かと考へた。種々心當りを考へながら町を歩いて居ると、知らぬ間に元の別宅のあつた處へ来て居た。別宅は何處かへ取運ばれて其跡に地主の土居家が土塀を周らして居た。僕は數分間闇中に佇んで凝乎と其土塀を眺めて居ると、子供心にもホロリとした。一雄と云ふ幼な友達が近所に住んで居たので、其家の前へ行つて門口から呼ぶと直ぐに出て来る。

「真ちゃんかい、久振りやなあ、何時龍神から出て来たんやのい」

「今日来たんや、私、これから東京へ行つて勉強する積りや、安さんは家に居るか
いの？」

「居りやんす」

兩人は連立つて、安さん處へ行つた。安藏君は姓を尾平と云つて、お父うさんは

大工職で、別宅を建てる時盡力して以来、始終出入して心安くなつて居たから、僕は其家へ頼んで一晩宿めて貰ふ事を定めたのであつた。

「安さん、私ね、今晚宿る家が無いんじや、單獨じやさかい宿屋へ宿るのが嫌なんじや、君の處へ一晩宿めて呉れんかいの」

「一寸待つてん」と、家の中へ走り込んだ安さんは、家内の人達と種々相談して居るらしかつたが暫すると出て来て、

「真ちゃん、家狭いさかい、可う宿めんつて」と云はれた時、僕の小さい心は本當に暗くなつた。けれども致方が無いから、安さんや一雄さんと一緒に行つて貰つて、中學時代友人が下宿して居た家へ行つて、一晩宿めて貰う事にした。草鞋を脱いで居る僕の様子をジロ／＼見て居た主人は突然、

「お前はん、家を逃げて來たんやないかい？」と訊いた。僕は急所を突かれて一寸狼狽しかけたが直ぐに、

「其様な事あるものかい、明日の船で御坊の叔母さん家へ行くんじや」と云つたので主人は其れ限り黙つて了つた。

茶の間に上つて小母さんの出して呉れた茶粥をサラ／＼と二三杯啜り込む後、宿で下駄を借りて小學時代の恩師福田先生を訪ねて萬事を打明けると、諄々と誘惑と云ふ事に就いて訓戒してくれた上、餞別まで下さつた。

旅は道伴れ

翌る日正午、十八錢の旅籠代を拂つて船着場へ出た。三百噸足らずの大阪行の汽船が静かに煙を吐きながら横はつて居た。寺本、尾平、武田の舊學友諸君が見送りに來て呉れた。

躰て船は田邊港を解纜した。三等室の中央に陣取つて日記を附けて居ると、客の一人が聲を掛けた。

「坊んち何處へく行んや」

「東京へ行くんや」

「獨りでああ偉いなあ、一體幾歳や」

「十五や」

「東京へ何しに行くんや、能うまあお父さんやお母あさんが出して呉れはつたなあ」
「東京へ勉強しに行くんや」

「偉い」と煽動^{ほた}てられた僕は、段々調子に乗つて、餘計な事迄喋り出したので、船客は皆僕の周圍に集つて来て、種々な事をほじくり聞いては、船ボーイの賣りに來た大阪名物の粟^{あわ}おこしや羊羹を買つて、僕に呉れたりした。比井の岬^{さか}を迂航^{まが}する頃から僕は船量^{ふねりか}を覚え初めた。駿河の富士の山ふところに呱呱の聲を擧げてから、十五の時に、海から十里も離れた山奥に育つた僕には、海の旅行が何ものよりも禁物で遂々湯淺沖當りから、へとくになつて了つた。其時二十四五歳の青年が非常に親

切に介胞して呉れた。のみならず、其青年は大阪川口に上陸して梅田驛から東上の瀛車に乗る時、何くれと世話をして呉れたのであつた。

生馬の眼をぬくといふ都へ、唯つた一人で旅立たうとする僕には、此の青年の親切が本當に嬉しかつた。米原驛で此の青年と袖を別つた時、僕は涙ぐむ眼で汽車の窓から彼れの後姿を見送つた。

汽車の一人旅は可成り僕の淋しさを誘出したけれど、雜囊^{ざんのかう}の中から立志小説や、東京へ行つたら直に入會の出来る様に、手續を済ましてある青年同志會の規則書など取出して見て居る中に、光明に充ちた前途が眼前に幻のやうに見えて來るので、限りなく小さな胸を躍らせて居た。

船中と同様に車中にあつても、少年の一人旅は乗客の視聽を惹いたものと見え、隣席や前に腰かけた人達から種々な話をしかけられた。中には心から細々の注意を與へて呉れる人もあつた。

名古屋から乗った如何にも人好きのする一紳士は、最初の中は僕を種々に観察して居るらしかったが、

「貴方お單獨で何處へ行きなさる？」

「私東京へ行きますんですが、今晚は静岡へ宿らうと思つて居ます」

「東京に御両親もお在んなさるのか？」

「いゝんえ、東京には知つて居る人は誰ありません。お祖母さんが静岡から十里餘り離れた富士岡と云ふ所に居りますさかい、其處へ行つて四五日遊んでから東京へ行つて勉強する積りです」

紳士は眉に皺を寄せ乍ら、僕の示した青年同志舎の規則書を見て居たが、「富士岡の伯父とやらに、もつと詳しく同舎を調査して貰つて、其れから上京なさい。自分は其舎を十分に確實な舎と信ずる事が出来ない」と云つて、懇々と、苦學を餌にして、田舎出の青年を釣る種んな悪い機關が、東京に多い事を注意して呉れたのであ

つた。紳士があまり熱心に云つてくれるので、僕は同舎に對する失望を感ぜざるを得無かつた。其紳士は濱松で下車した。プラットホームを歩むで行く姿を見送りながら僕は陰鬱な心に蔽はれて居た。

「若し青年同志會が紳士の云ふ様な詐偽的なものであつたな、如何したら可いだらう？」僕の心は千々に碎けた。兎も角も富士岡へ行つて、祖母や伯父とも相談して善後策を講じよと心を定めた。其内又掛川邊りから乗つた一人の老人と知合となつた。老人は僕の静岡一泊を知つて、

「静岡には摸掬が澤山居るから御注意なさい、汽車から降りると待合所に顔中鬚髯の一ばい生えた老人の巡査が居るから、其巡査に宿屋を教はりなさい」と注意して呉れた。

摸掬の事は出發の前夜松本先生が、個條書にして訓戒して呉れたものの一である。梅田驛で汽車に乗つてからと云ふものは、母が縫つて呉れた胴巻を、腹へ確と巻き

つけて、帯の上から片手離さず握つて居たのであるが、老人から更に摸掬の注意を受くると、今更の様に嚴重に兩手を油断なく胴巻の上に掛けてゐた。

静岡驛に着くと、最う邊りには全部夜の幕が垂れこめて、富士嵐に市の電燈が寒さうに輝いて居た。丁寧に老人に禮を云つて改札口を出ると、教へられた老巡査が髯の中から大きな目をギョロつかせて、群集の中を物色して居た。僕は直ぐに俥屋を呼んで、

「なるだけ停車場に近い、餘り上等で無い宿屋へ案内で行つてお呉れ」と、たのむと、俥夫は巡査の顔をチラと見てがら／＼と車を引出したと思ふと、驛の直ぐ前の増田屋と云ふ旅舎の前へ梶棒を降した。僕は心中で「成程、これは僕の注文通りの旅舎へ案内して来たワイ」と思ひながら、俥夫の要求通り五錢の白銅一枚渡した。

表二階の一室に通されて、暫く休憩んで居ると、後から二十歳許りの青年が入つて来て僕と相客になつた。頭顱の全然禿げた宿の亭主らしい老人が、宿帳を持つて

来て、型の如く二人の住所姓名を書き終ると、僕に向つて、

「宿泊料は幾程に致しませう？」と云つた。

「四十錢位で泊めておくれ」

「四十錢と云ふ宿賃は有りませんよ。はい最う少し奮發して下さいな」

「そんなら五十錢で泊めておくれよ」

「じゃ、さう云ふ風に致して置きますせう」

亭主は次に僕と相宿の青年に向つて、

「貴方もさう云ふ事に致して置きますから」

「否、否、僕は本當にお金を少し許りしか持つてゐないので、四十錢で泊めてくれなくては困るんです」

青年が頗る強硬に四十錢説を主張すると亭主は根負して、

「夫れじゃ致方が有りません其れで宜しうございます」と、云つて室を出て行つた。

僕は内心「亭主の奴、僕を子供と侮つたな、失敬な！」と頗る不満であつた。

二人が風呂場から上つて來ると、女中が食膳を運んで來た。僕の膳の上には焼肉一皿餘計に戴つて居た。尙十分の効果が夜具にも現はれて、僕には青年のよりも上等らしい蒲團を布いてくれた。青年は「君お休み」と、云つて先に寢床に潜り込んだ。僕が雜囊の中を整理して居ると、豊橋で買った晝辨當の空折が出て、その中には喰殘しの鯛が一尾箸も附けずに入つて居た。床の中から其れを眺めて居た青年が「其折をくれんか」と云ふから、「ウン」と點頭くと、床の中からムク／＼と起上つて來て、急いで自分の風呂敷包みの中へその折箱を入れた。「變な男だな」と、僕は心中で考へてゐた。關西地方では用ひない夜着の袖が馬鹿に氣になつた。結局手を通して寢るものと獨りきめにきめて、兩手を左右に通して寢た。寢乍ら二人で種々の身の上話をして見ると、青年も僕と同様に苦學の爲に上京するのであつた。翌朝になると青年は紙片に東京の行先を書いて、着京したら訪ねて來てくれと云つた。

朝飯の時青年が熱い飯を何杯も茶漬にして食べるから、妙に思ひ乍ら見て居ると、女中に湯を取りにやつた後で、大急ぎで、前夜僕の遣つた辨當の空折に櫃の飯を詰め込み始めた。

十年振り

鈴川驛で汽車を乗り捨てた僕は、俵を驛から一里在の富士岡へ走らせた。

田の畔道を俵が進むほどに、前面には白帽を戴いた富士が朝暾に秀でて立ち、左右には裾野平野がすつと展開して居る。更に東の彼方には箱根の連山が見え、西方には五十三次として有名な吉原が、鈴川から千本松原を引いて眺められた。

「彼の山裾の杉のこんもりした處が富士岡であらう。お祖母さんは如何な顔して僕を迎へてくれるだらう。六つの時に父母に連れられて、紀洲へ行つてから十五の今年迄、殆んど十年振りだから……」

などと考へて居るうちに、懸て俾は村の入口に來た。遠方から不審に眺めた赤い奇妙なものは、日露戦役に出征した忠勇な兵士の歸來を迎ふる凱旋門であつた。村に入つた俾夫が大塚の家を聞くと、畑打つて居た老婆が、

「其りや、佐吉さん家すら」と、云ひ乍ら丁寧道順を教へてくれた。俾が伯父の家の前に停ると、麗かな日光のさし込む儘に明放した障子の奥に、火鉢を圍んで座つて居た伯父らしい人が先づ「やあ」と云つた。そして、離座敷の方に向つて、「お祖母さん！ 眞一が來ましたよ！」と大聲で叫んだ。僕が伯父に挨拶をして居ると裏から伯母や大澤の伯母が入つて來た。

「まあ、お前大きくなつたね、實は昨日お前のお母さんから手紙が届いて、今朝も佐吉とお前の噂をして居たのだよ」と、祖母は慈愛の満ちた眼で僕を見乍ら云つて居た。祖母は其頃は餘程健康を恢復して居たが、僕達が紀州に歸つて後には、持病の心臟病が重つて來て、血を一度に一升程も吐いた事があるなどと云つた。

「最うまあ紀州に居るお前達の誰にも遇へないと覺悟して居た」と言つた時、僕はしみじみ故郷に居る母の事を想ひ出したのであつた。

其夜故郷の母へ宛てて、安着の報知を兼ねた長い旅日記の手紙を書いた。

虎ヶ峰を越す時、堪らなく淋しくなつて、母に會ひ度かつた事や、田邊の元の別宅の在つた前で發憤した事や、船に酔つて嘔吐して、親切な青年に介抱を受けて嬉しかつた事、祖母も伯父も皆達者で僕を喜んで迎へてくれた事などに附け加へて、尙東京の青年同志舎はどうも不確實なものらしいから、伯父ともよく相談して出京を決定する積りだとも知らせた。

僕は離座敷の祖母の隠居所に暫く滞在する事になつた。

毎朝早く起きて、近所を流れて居る小川で冷水摩擦を済ますと、芙蓉の峰に向つ

て一心に前途の多幸を祈つてから、庭や門口を掃き終つて、大澤の伯母が入れるお茶に、皆と一緒に火鉢に温まり乍ら、祖母と伯母に故郷の話をして聞かせた。

或日、沼津に四五日行つて留守であつた大塚の伯父が、何か手土産を持つて隠居所へ入つてきた。

「伯父さんお歸りなさい」と、僕は、折柄讀んで居た英語讀本を伏せて挨拶すると伯父は一寸會釋して、

「眞一は如何したら可いすらかなあ」と針仕事をして居る祖母に話掛けた。

「左様ね、此儘東京へ行つたとて、見ず知らずの他人の中で苦勞するばかりだものね、其れに貴方も云ふ通り、苦學同志舎はどうも當にならないものらしい……」と、祖母は針の運びを止めて云つた。

お母さん、中學は何校だつて同じだから、眞一を静岡中學へ入れてやつて、授業料と小遣錢位實家から送つて貰ふ事にして……何處かへ書生にでも置いてくれる家

を目付けてやらうと思ふがね」

「さう出来るなら眞實に好いがね」

「それじゃ郷里の方へ手紙を出して見ませう」と云つた伯父は僕の方を振向いて、

「眞一はまあ伯父さんに任して置きな、好い様にして上げるから」

僕は本當に嬉しかつた。

其翌日母からの第一信が届いた。母に送つた安着の手紙の返事で、お前の手紙を見てほつと胸撫で下ろしたと云ふ事から始まつて、「お前が出發してからと云ふものは、母は一晚だつてまんちりと眠つた事が無い。毎朝、郵便の來るのを待つて、祖父宛に配達される新聞や手紙の中に、ひよつとするお前の手紙が挟つては居やせぬかと思つて、血眼になつて探した」などと書いてあつて、最後に、暫く滞在したら東京へ出て、どんな苦勞をしても初志を貫くやうに、死んでも松本家の家名を汚す行爲を爲てはならぬと書いてあつた。

僕は母から第二信の届くのを待つて、總てを決定する事に覺悟し、一種の不安に驅られ乍ら、毎日、郷里の祖父から、伯父への返事を待詫びて居た。

家を逃げて走つたのだから、祖父から何と云つて來るか知ら、母だつて、「東京へ着いて萬一病氣にでもなつた時には、どんなにしても療養費位送つて上げるけれど、實家は此有様だから、學資の補助は當にしてはならぬと出發の時云つて居た位だから、直ぐに伯父の提言を容れてくれないであらう」などと小さい胸を痛めて居た。

間も無く祖父と母から、伯父へ宛てた返事が届いた。

祖父の手紙は、先づ時候の挨拶や久濶の叙などに始つて、眞一の學資に就いては御相談を應諾する譯に行かぬと、伯父の提議を先づ拒否し、其の理由として家運の没落や父の難病を擧げ、何處か將來有望な商店に奉公にやつてくれと結論してあつた。母の手紙も祖父のと小異であつた。

伯父は祖母と僕とに手紙を読み聞かせてから、

「まあ何とか成るすらよ」と云つて、手紙を袂へ入れた。

伯父から祖父へ、祖父から伯父へ幾度か手紙が交換されて居る中、何時の間にか櫻の蓄がふくらむ三月になつた。祖父は不相變學資の補助を拒否して、商店奉公説を持續して居たが、結局僕は伯父との相談で、兎も角も静岡中學の入學試験を受けて見る事に話を定めた。

三月の末になると伯父が静岡へ行く用事の出來たのを幸に、僕も伴れられて静岡へ出た。中學校へ行つて受験手續を濟まし、二人で淺間神社に參詣して、後の賤機山へも登つて安部河原を俯瞰したりした。

夕方になつて伯父は、宮ヶ崎町の太田屋と云ふ宿屋に僕を伴れて、其宿の主婦に僕の萬事を依頼して置いて、富士岡の方へ歸つて行つた。二三日すると入學試験が濟んで、僕は四百人近くの志望者の中から、幸にも好成績で入學を許可せられる事

になつた。

拜啓益々御清祥奉大賀候。扱て今回中學校へ入學許可せられたるにつき月々八圓の學資金及び入學頭初の洋服代書籍代等送附せよとおぢい様の許へ御申越の由。然る所おぢい様の申さるゝには、家運日に非なるのみならず英一郎は病氣なり、とても調金する事が出来ぬ。不便なれども何とも致し方なし。併し英一郎の病氣も快方に赴き來年文雄も卒業せば其中には何とか都合も出来ようから、夫迄奉公でもして時節の來るのを待つより外に致し方が無いと、非常に不仕合せを嘆かれたる由、本日君の母君より承り申候。折角試験を受けて入學許可せられたる處へ、とても學資金が出来ないから奉公せよなどと云はれたら、定めて非常に力を落しがつかりするならんと深く／＼同情の念に堪えぬ處である。君の母君が此事を云

はれて實に不便だと潜々と泣かれた。僕も貰ひ泣きました。噫不運なる眞一君よ。君は今運命の神の手に弄ばれて居るのである。大聖人孔子さへも一生不遇で終つた位であるから、諦めねばならぬ事と諦めて靜に時の來るのを待ち給へ。餘り落膽の結果自暴自棄し給ふな。大きな商店で奉公するか學校の小使をやるかして一ヶ年程辛抱し給へ。其の中には何とか都合出来よう。若し伯父さんの家に厄介になつて吉原の高等小學校へ通學しつゝ、傍ら英語を研究して、來年度中學校二年生への編入試験を受けたら如何ですか。君の勉強次第で必ず旨くやれます。左すれば今入學せずとも來年二年になるのだから結局同じ事です。彼のゴムは無理に引き伸ばせば随分のびるものですが、併し手を放せば直ぐ縮まる。學資金が覺束ないのに無理／＼に入學した處で、直ぐに途方に暮るる様になります。其れよりは今一時縮つて居つて、來年伸びる方が得策ではありませんか。どのみち運命の神に勝つ事が出来ないのだから、暫く運命のまに／＼随ひ給へよ。噫、憐れなる

眞一君よ、筆の運びは拙いが右よく御覽の上決してく自暴自棄し給ふな。呉々も願上候。

四月三日

松本眞一君

松本秀葆

波上の月

愈々静岡中學に入學をしたが、當面の緊急問題は未解決である。僕は改めて祖父に幾程でも可いから補助を仰ぎ度いと懇願の手紙を出すと、祖父から月謝だけは補助してやらうと云ふ返事が來た。無論其れだけの補助では足りつこはない。先づ第一何とかしてパンの途を求めなくてはならぬ。僕は小さい胸を千々に碎き乍ら、兎も角も母に貰つた旅費の残額で入學準備を調へて、四月一日から通學し初めたのであつた。保證人には太田屋の主人加藤清次氏に成つて貰つた。しかし月六圓で約束し

た下宿料の出所がないので、どうしようかと思案してゐると、或日の事、太田屋の老母が僕を呼んで、

「眞ちゃん、伯父さんとね貴方の下宿料は月六圓と約束したけれど、學校から歸つて家の用事を手傳つてくれるなら、四圓で置いて上げるがね」と、云はれた時の嬉しさと云つたら……僕は一も二もなく其提唱を容れて、其日から酒屋米屋の使歩きから帳付け迄も手傳ふ事になつた。けれど其の四圓の下宿料の出所さへ無いのである。何とかしてパン代を得る様にし無くてはならぬ。といろく思ひ煩ひ乍ら、何と云つても年端の行かぬ身の、母を心配させるより外は無かつたから、更に母に月五圓の補助を頼み込んだのであつた。

先日より再三の御書面夫々拜見致し候。いよくお前様にも御無事御通學の由萬々目出度存上候。然る所片々五圓の金子入用との事母も日々案じ暮し心を千々に

碎きたる末、祖父様にいろ／＼御願ひ致して此のたび裁縫の指南を始め申し、其の収入にて祖父様より月々五圓お前様へお送り被下る事に相談いたし候間御安心なさるべく候。只今は七八人來り朝八時より午後四時迄教へ、其れより炊事手傳を致し母は少しの間も休む時無くはたらし居候。是皆お前様の爲を思ひての故に候へば、随分辛抱に辛抱して天晴れ立身出世を遂げ此の母を喜ばしてくれよ。母は唯是のみお前様に頼み上候。(下略)

四月十五日

眞 一 どの

母 より

僕は讀乍ら母の手紙を押戴いたのであつた。

母の辛勞に依つて祖父から送つて來る五圓の金子で、下宿料と小遣はあるが、借授業料の出所が無い。思案の末僕は「半巾はんけんかゝり」の工場へ午後から通ふ事にした。

十日許り通ふと日に十錢位取れるやうになつた。二十人餘りの女工の中に、男として唯つた一人僕が交つて居たのであるが、毎日々々、低級な下らない事許耳に入るので、これは斯んな所に居ては破滅だと思つて、間も無く工場通ひを止めて了つた。

夫れから、いろ／＼考へた末、静岡新報の「はがき欄」に、

年十五ごじゅうご靜中一年生晝間通學の餘暇を賜はるお家うちに書生として置いて下さるところ無きや。

と書いて投書して見たが、無論應じてくれる家があらう筈は無かつた。次いで、更に僕は同地の新聞賣捌所である静岡新聞堂に宛て、長い／＼手紙に自分の境遇を訴へて、新聞配達に雇つてくれと頼んだ。所が夫れも「満員謝絶」の返事が來た。

種々いんげん小さい胸を碎いて、不足な學資を補ふ方法に就いて思煩ひ乍らも、學校から歸ると、米屋や酒屋へ走つて行つたり庭を掃いたりして、宿のお手傳をして、暇々ひまひまには勉強を續けた。

太田屋の人達も下宿して居る客も皆「真ちゃん、真ちゃん」と云つて僕を可愛がつてくれた。宿の老母は、知己や親戚の人が来る度毎に僕を賞め乍ら紹介した。其等の人達の中には、

「此の子は偉うなつたら馬鹿に偉うなるけれど、一旦グレ出したら始末に終へぬ者になる」と僕の顔をジロジロ見乍ら面と向つて云ふ人もあつた。僕は何を云はれても黙つて聞いて居た。

太田屋の親戚に當る大鳥と云ふ人が、町の商業學校へ通つて居る令息を訪ねて来て、太田屋へ宿つて居た。僕が或日學校から歸ると、

「真ちゃん一寸お出で」と、老母が呼から直ぐに行くと、其處には大鳥氏が酒を飲みながら老母と話をして居た。

「まあお坐りなさい」と大鳥氏は僕に話しかけて、

「君の事は此家のおばあさんからよく聞いて知つて居ます。それから君のお母アさ

んからおばアさんへ來たお手紙も見せて戴いた。私の今年十六になる悴を君と引較べて見て、全く君には感心して居る。けれど君が家を逃げて來た事には反對だ」斯う云つて大鳥氏は眉を引しめ乍ら、猪口の酒をちびりと飲んで茶餉臺の上へ置いた。

「君のお母さんのお手紙に依るとお家は餘程お困りの様子だ。一家の御面倒を見なさるお祖父さんはお年を老つて居られるし、お家を繼がる、筈のお父さんは半身不隨と云ふ大病に罹られるしね………子供と云つても君は最う十五じや、實家うちに居られたら、どんなにお祖父さんのお役に立つか知れぬ、實家へお歸りなさい、實家へ歸つてお祖父さんのお手傳ひをしながら、お父さんの御病氣を看護しなさい。二年辛抱したらお父さんの御病氣も全快せぬ迄も餘程回復して、それに、お家の整理も附くしろし、其れから勉強に取懸つても決して遅くはない。ね、悪い事は云はぬ。さうなさい」

黙つて聞いて居た僕は突然頭を擡げた。

「よく判りました。けれども斯うなつては最う死んでも成功しなくては歸りません」
僕が斯う云つて立上ると、大鳥氏は紙入から一圓札を一枚出して、

「これは誠に失禮だけれど、本でも買つて下さい」と云つた。

「このお金銭を戴く理由がありません」

斯う云つて僕がお返しすると大鳥氏も、宿の老母も強いて僕に受取らせんとした。

僕は生來の頑固者であつたから、とう／＼大鳥氏の親切を無下にした。後で老母が、
「彼様な時には貰つて置くものだよ、返すと却つて失禮になるのだからね」と、僕に注意したから、「左様かな、ア、そんなら貰つて置くんだったな」といふやうな事を考へても見た。

其晩に大鳥氏は、商業學校の寄宿舎から令息を件れて太田屋へ歸つて来て、僕に紹介せたら、

「何卒これから此の子と遊んで下さい」と云つた。僕は其の令息に、

「何卒宜しく」と頭を下げて居た。令息は父の命令を守つて、其後三四度遊びに來たが、僕が何時も忙がしくて遊べなかつたので、それつきり來なくなつて了つた。

喜林さんと云ふ巡査が同宿してゐて、よく僕に雜記帳や鉛筆などを買つて來てくれた事もあつた。

新聞配つて静岡中學に

四月の末頃であつた。學校から歸つて本包みを解いて居ると、黒い前掛を當てた商店の小僧らしい十五六の少年が僕を訪ねてきた。

「松本つて君ですか、僕は新聞堂から來たんですが、主人が君に會ひ度いから來て下さいと云ひました」

「あ、さうですか、其れは御苦勞さまでした。では今晚お伺ひ致します」

小僧君の歸つた後で、僕は宿の家内達といろ／＼話をしたら、飯を食べてから吳

服町の新聞堂へ出掛けて行つた。

新聞堂の主人夫婦は僕の來るのを待つて居てくれた。用事は無論先の日、僕から手紙で依頼した事柄に關してであつた。主人夫婦から聞かると、儘に僕は詳しく身の上を物語ると、大變同情してくれて、晝間の通學は許して貰つて、其代り朝夕は新聞を配つたり、小僧代りに働くと云ふ風にして、新聞堂へ住み込む事に話が定つた。僕は嬉しさに飛上りながら走つて宿へ歸つて行つた。

愈々明治三十九年五月上旬から新聞堂に入つて、僕の苦學生活の第一歩が踏出さるゝ事となつたのである。

新聞堂の家内は皆、好人達許りであつた。尤も主人は中々の疳癪持ちで、時々霹靂の様に店の人達を我鳴立てたが、其の後は暴風雨の風いだのちの静けさがあり、奥様も細かい處迄僕達を勞り可愛がつてくれた。小僧代りに働いて學校へ通ふ少年は、僕の外に二人居て、皆新聞堂の親戚の者であつた。前日僕を訪ねて太田屋へ來

た少年は、市の商業學校へ通學させて貰つて居た。店には、小僧から勤め上げた老店員が三四人も居て、營業振は仲々繁昌して居た。

毎朝四時に起きて、他の同僚小僧君と共に諸準備を調へ、下り一番列車で東京の諸新聞が着くと、通ひの配達人達と共に新聞を六時頃迄折り、全部折つて了つて配達人の間に分配が済むで、皆配達に出掛けると、今度は僕達の持数を渡されて、僕は自分の受持ちの配達區域へ走つて行くのであつた。途中最寄りの町家を五六軒配つて、直ぐに静岡師範學校の寄宿舎へ行つて一度に五六十枚置くと、静岡商業會議所に四五枚投り込んで、静岡三十四聯隊へ飛んで行く、此隊では師範校と違つて、各中隊の各室ごとに一枚／＼配り歩くのだから、随分時間がかゝつた。瞬時も休まずに配り終つて、ひた走りに走り歸ると七時過ぎ。直ぐに朝飯を掻き込むと、制服着替えるのもソコ／＼に、又もや大急ぎに中學校へ飛んで行くのであつた。學校は草深と云ふ市外れにあつて、新聞堂から三十町も離れて居たから、通學には容易で

無かつた。學校から歸宅ると直ぐ、小僧となつて東へ飛び西に走る。晩飯が濟んでから初めて自分の體となるのであつた。店を綺麗に片附けて三人の少年苦學生は、仲善く机を並べる。最初のうちは皆一生懸命に算術書や英語讀本を見て居るが、八時九時となると、晝間の疲勞も出て競争の様にコクリ／＼と舟を漕いだ。奥様はクス／＼笑ひ乍ら可憐な苦學生達の眼を覺させては、種々勵ましてくれるのであつた。十時、店の大戸を下ろして店員一同寢に就く其時の嬉しさ。三人の者は手を取らむ許りに喜び合つて蒲團の中へ潜り込むのであつた、思へば寢る程樂があらはこそである。

今でこそ平氣で自傳の一節を埋むる爲に、當時の有様を叙して居るが、母には種々泣事を知らせたと見えて、古い母の手紙の中から此様なものも出て來た。

今はおんみの決心一つにて末は如何なる人にでもなれる。大切の時に候に少しば

かりの辛苦にまけて母に泣事を云ふとは何事ぞ。まことに男子と生れし甲斐なからずや。おん身は出發のとき母に誓ひし言葉を忘れ候ひしか。二三年間辛抱致し、やがて成長の後は目出度面會する事あらん。夫迄は母の事は一切思はず一心に家業を手傳ひ勉強なされ度候。其のうちには好きな友達も出來候て樂む日もあらむ。親の金を費ひて面白き事をするものを見て、それがおん身に羨しく思ふか。苦學に其の身をけづり一人前の人間と相成。候はゞ、其れこそ國のほまれ家のほまれ、今おん身が厄介となり居る新聞賣捌所こそ、おんみに取りては實に將來の幸福を築き上ぐる大事な場所、必ず／＼其處にじつと辛抱して、人々にほめられる様なし下され度、暮々も母より頼み上げ候。

父上も今は、湯の峰温泉より御坊町にうつり田中病院にて療養中に候。醫者の云はるゝには、最早到底兩足は立たずとの事何もかも運命に候も實に御いたはしき限りに候。母の辛苦を察して何卒辛抱なされ度候。父上へはお見舞狀度々出しな

さるべく、五月分の少年の本送り候ひしが受取りしか。

五月十二日

真一どの

母よ

新聞堂に女學校へ通ふ妙齡とせうの娘さんが居た。僕が晦日みそかになつて新聞代集めに師範校の寄宿舎へ行くと、師範生の間評判になつて居ると見えて、よく娘さんの事を聞かれた。僕が中學の制帽を被つて行くと、弟だと思つたんだろう。君の姉さんは幾歳いくつで女學校の何年生かなどと聞くものもあつた。中に圖々しい奴が居て、「君の姉さんにこれを持つて行つてくれんかね」と、手紙を出す者すらあつた。寄宿舎へ毎朝配達する紙数は念ねんに念を入れて、不足の無い様にして、投げ込むのに、よく一枚足り無いとか、二枚足り無いとか云つて、新聞堂へ態々新聞を取りに来るものもあつて、僕は其度毎に『注意して配達し無くては不可いけない』と、主人に小言を食つて、

變に思つて居た。

新聞配達の歸途かへりによく學友達と出遇つたから、何時の間にか學友達から「松本の代りに『苦學』と云ふ代名詞を呼ばれる様になつた。

畑中中尉殿

新聞堂で配達小僧をし乍ら中學校へ通ふ事は、大變に忙しい事であつたけれど、其れでも主人夫妻や皆の者から可愛がられて、前途は多望な幸福の身であつた。時々故郷の母へ泣言を云つたが、其度毎に母から激勵せられて奮起した。松本先生や竹馬の友達や親戚の誰彼からも、度々鞭達の手紙が届いて、常に感激を新にしては限りなく前途の光明を憧憬し乍ら奮闘を續けて行つた。

明治三十九年六月上旬の或朝、僕は例に依つて、大急ぎで静岡聯隊の中を配達し乍ら、醫務室の前へ來て一枚投げ込むと、

『おい』と、中から聲を掛けた人があつた。

『何ですか?』と答へながら、二三步戻つて醫務室の中を覗き込むと、軍醫の三四人腰掛けた傍に、一人の青年將校が口髯ひげを捻上げ乍ら立つて居た。

『新聞を配りながら勉強が出来るか?』

『出来ん事も有りませんが忙がしくて堪りません』

『都合に依つて俺の所へ来い! 勉強させてやる、併し蒲團があるか』

『よく考へて見ます。蒲團は郷里くにへ云つてやれば送つて來ます』

斯う云終はると僕は一散に新聞を抱えて、配達を續けて走つた。

其日は一日此青年將校の云つた言葉が頭の裡うらを徂徠して、學校へ行つても新聞堂に歸つても小さな頭を傾かげて思案にくれて居た。段々考へて居ると、此の青年將校の家に世話になる方が餘程樂で、思ふ様に勉強が出来るに違ひ無いと思ひ込む様に

なつた。すると甘い迷想許り頻りに湧いて來て、長い將來を想ふ冷靜さが無くなつて仕舞つた。僕は堪らなくなつて新聞堂を出て青年將校の家へ走りたくなつた。

青年將校は畑中恭二氏と云つて當時中尉で、追手町に御飯焚きの婆やと二人暮らしの簡易な生活を送つて居るのであつた。

御書面に依りおん身此度新聞堂を出でたることを承知致し候。他人の家に世話になるには中々おん身の様な氣まゝにては、到底一年の日もむづかしく、又如何様なる艱難辛苦も堪えらるとて故里を立出で候ものを、少しばかりの苦しき事ありとて三ヶ月も立たぬ内に轉宿などは、實に世間へ聞え恥かしくは無きや。梶屋のお京けいさんや丹生の川の管龜さん達が、おん身に對しお恵み被下候ひしは、おん身が苦學する事にめんじての事なり、萬一此後たりとも氣儘をして轉宿致さば、一

錢のお金も送り不申、これ限りおん身は無き者と諦め、書面一通も差出し申さず候間左様御承知これあるべく候。此の事よく／＼お考への上も一度新聞堂へ戻る様になされ度候。實に涙に咽びつゝ此手紙を認め心の萬分の一を申入候。

父上は未だ兩足たち給はず、おん身しつかりせずば誰が父上を養ひくるゝや母はおん身一人を頼り、衣類有る品皆賣りておん身に送り、毎日天地に祈りてはおん身の出世を相待ち申候。新聞堂へも同時に頼み状差上置き候間、何卒／＼母のたのみ故再び同家へ戻り相勤め申様これのみ一重に申入候。

唯今畑中様方に御厄介に相成り候ても、萬一其のお方が遠方へ御轉任なさる事とならば又其時は何とせん。今辛き事有る共新聞堂に置いて貰へば、おん身の覺悟次第にて何年までも置いてくれる。此事お聞分けの上母の心配を不惑と思はゞ最一度新聞堂へ戻り候様かへす／＼も申入候。

母も此頃のぼせ耳遠く候。書面認めるもおつ／＼に候へ共延して置けぬ事故早々

に申入候。あら／＼かしく

六月十九日

母より

真一どの

日記の中から

六月十五日 晴

數百里へダテシ異郷ノ空ニテ斯克モ苦勞ヲナスハ皆將來ノ爲カ、噫。
人力車業ト掲ゲタル所へ行キ新聞堂へノ書面ヲ依頼シ、序デニ裕ト羽織ヲ入質シテ貰フ。金一圓十錢也、其内三十錢種々使セシ賃トシテヤル。夜ニ入りテ中尉殿ノ宅ニ移ル。

六月十九日 曇

山又山ヲヘダテシ異郷ノ空ニテハ、目前ニ見ユル賤機山モ後ヲ流ル、安部川モ、恰

モ故里ノ山川ニサ、モ似タル心地ス。悲シキ哉。戀シキ母ナク懷シキ弟ナシ。悲シキ時ハ唯一人袖打チヌラス。

六月二十日 雨

憶本日コソハ月謝ノ納付日ナレ。悲シイ哉故郷ヨリハ送金無ク、正ニ進退コレ谷マリヌ。學校ヨリ歸宅後ウツラノトシテ日ヲ送ル。然ルニ神ハ遂ニ余ノ願ヲ聞給ヘリ。即チ夜ニ入リテ新聞堂店員中田氏余ヲ訪ネ來リ、新聞堂ニテ余ガ貯蓄セシ五十錢餘ノ金ト、親切ナル新聞堂奥様ヨリ、余ニ貸シ給ヘル一圓ノ金ヲ余ニ渡シタレタリ。實ニ奥様ノ御親切筆紙ニ盡サレズ。

七月四日 曇

本日懷シキ母上及弟ヨリ書狀着弟ヨリハ先日送附セシ繪ハガキノ禮狀ナリキ(下略)兄上ごきげんでございますか伺上げます。私もぶじでつうがくしております。兄上がるすになつてから大へんさむしうございますから、いつでも母上と話をしま

す。兄上様すいぶんべんきようしてえらい人になつて早くかへつてきて下さい。たのしんで待つております。私もおとなしくべんきようして居ますから御あんしんして下さい。先日はゑはがきを澤山おくつて下さいまして有りがたう御座いました。

七月一日

三 郎 拜

兄 上 様

七月五日 晴

實ニ余ハ幸福ナリ。渡ル世間ニ鬼ハナシトハヨク言ヒタリ。然リ而シテ陸軍歩兵中尉畑中恭二氏一朝余ヲ憐ミ給ヒ、遂ニ余ヲシテ十二分ノ餘暇ヲ與ヘテ通學ヲ許サル。豈喜ブベキノ限ニアラズヤ。願ハクバ慈悲深キ中尉殿ノ宅ニ永ク居ラレン事ヲ。而シテ斯ノ如キ中尉殿ヲシテ無事息災ニ、且ツ其ノ目的タル最上官ニ進級セラレン事ヲ祈ル。

七月八日 晴

本日ハ日曜日ナリ。朝習字ノ稽古ヲナシ其レヨリ地理國語歴史ト順次ニ試験準備ノ爲ニ復習ヲナシタリ。而シテ少年世界ヲ讀ミテ大ニ感動スル所アリタリ。即ち『いい子』と云ふ立志小説ナリ。吾モ男子ナリ。大ニ努力シ錦ヲ飾リテ故郷ニ歸ラン。艱難ソモ何物ゾ。

七月十二日 晴

本日學校ニテ岡村次郎ト意見衝突シテ結局組打チトナル。我輩元來身體小ナルヲ以テ下ニナル。笑止千萬ナル哉。而シテ歸宅シ見レバ故郷ヨリ蒲團着シアリキ。

七月十三日 雨天

昨夜中尉殿ノ兄君谷口利久氏來宅セララル。谷口氏ハ大分縣ノ判事ナリト。余ハ中尉殿ニ厄介ニナリ居ル事ヲ御禮申上ゲタリ。學校ニテ本日又モヤ松永文一ト意見破裂シテ戦端ヲ開ケリ。余ハ元來殘念ナガラ身體短軀ナルヲ以テ喧嘩ハ不得手ナリ。

歸宅後谷口氏ニ從ヒテ諸所ヲ訪問シ、夜ニ入りテ停車場ニ中尉殿ト共ニ見送リタリ。
(岡村松永兩君について、如何様な生徒であつたか今は如何しても思ひ出せない。
多分健在で居られる事と思ふ。)

噬臍の悔

中學校の文藝部で、學友會雜誌へ掲載する懸賞作文の募集があつて、『故郷の母へ』と云ふ題の僕の投稿が三等賞に入つた。そして間もなく級監督谷先生の私宅に呼ばれて、種々身の境遇を聞かれた上、激励の辭を頂戴した。

聽て第一學期の試験が終つて、七月二十一日から夏期休暇が始つた。二三日すると畑中氏に呼ばれて、お居間に行くよ、

「俺は今度都合によつて隊住ひをする事となつたから、夏期休暇から一旦新聞堂へでも歸つて居らんか」と申渡された。其時僕は自分の書齋に歸つて、今更の様に母

の手紙を繰り擴げて見た。しかし僕の將來の爲を慮ふ皆の豫想が餘りに早く來たので、最う泪は出なかつた。

僕は兎も角も夏期休暇を富士岡の祖母の處で過す事に決定して、其月の末畑中氏の宅を辭去して、一先づ富士岡へ行く事となつた。別れ際に近所の大村の小母さんが下駄を一足買つてくれた。

鈴川驛へ降車したのは夕方であつた。大きな風呂敷包みを擔ぎ乍ら改札口を出ようとする途端に、其の包から文具箱が落ちて、使ひ古しのペンが散亂すると、傍に居た十七八の驛夫が、欲しさうに『澤山のペンだなあ』と、云つたから皆くれてやつた。

荷物が有るから車に乗つて富士岡の大塚の伯父の家へ着いた。其時伯父は縁側で網を繕つて居た。

「伯父さん、廿一日から夏期休暇で唯今歸つて來ました。どうぞ休暇中置いて下さい、それから車賃を十五錢立替えて下さい」

「居りな」斯う伯父は唯つた一語囁んで吐出す様に云つたが、其れでも火鉢の引出しから車賃を出してくれた。僕は伯父が何と云ふか知らと思つて、内心尠からず不安を懷いて居たのであつたが、兎も角も伯父が承諾してくれたので、ほつと胸撫下ろし乍ら「何と云つても伯父だ」と、心の中で考へて居た。其夜から僕は、東京へ行つて留守である祖母の隠居所に獨りで寢て、晝間は伯父の家の仕事を手傳つた。朝夕は伯父の家に飼つて居る澤山な兎の餌を取りに、芝山へ草刈に行く外に、家内の人達と一緒に芋堀りに行つたり、従妹のすみ子と連だつて瀬勇川に蜆貝取りに行つたりした。僕が伯父の命令に従順に聞いたからでもあつたらうが、伯父も伯母も左様僕を厄介扱ひにせず、伯母はよく麥饅頭を造つてくれた。けれど先天的に氣難かしい伯父の、一旦害した感情は容易に解けぬと見えて、一度も僕に笑顔を見せてくれぬ事が限りなく僕の心細さを増して居た。僕は小さくなつて毎日佗しい日を續

けては、祖母の歸宅を待った。晝間は仕事に追はれて左程でも無かつたが、夜分單獨で隱居所に寝る時は、廣い世の中に自分一人ぼつちの様な氣がして、堪らなく淋しかつた。

或晩幾ら眠らうと思つても寝つかれないで、種々の事を考へて居ると何時の間にか泪が頬を傳ひ初めた。「女々しい何だ！」と心の中で自分を叱つて見ても、泪は止度も無く流れ出て居た。すると、

「眞一、最う寝たきやあ」と、不意に戸の外から、母の末の妹で、近所に嫁いで居るお久の叔母が聲を掛けた。

「いえ、叔母さん。マダです」僕は泪を拭くのもそこ／＼に、蚊帳から出て急いで雨戸を繰ると、美しい月光がサーツと室内へ流れ込んだ。

「僕は足音がした時誰か知らんと思つて吃驚しましたよ、最う十一時過ぎでせう」

「十二時を最う打つたすらよ、飴を持つて来てやつただにお食り」

叔母が歸つて行つてから、蒲團の中で飴を舐つて居ると、泪が出なくなつて、いつの間にか眠りに陥ちた事もあつた。心配すると思つたが、母に淋しさを訴へると、母からいろ／＼激勵した手紙に添へて五十錢送つてくれた時などは、僕は手紙を推し戴いて泣いた。

八月の初頃になつて、大宮在の上野村に嫁いで居る小山の伯母から、一度遊びに來いと云つて来てくれたから、大澤の老人に連れられて行く事となつた。小山の伯母は、祖母の妹で、僕の幼い時よく可愛がつてくれた高橋の伯父の處へ一旦嫁いて居たが、伯父に死に別れてから小山家へ再縁したのであつた。八月九日出發。大澤老人は非常に面白い人で、淋しい野道を僕に疲れさせまいとしてか、種々な面白い事を僕に云つて僕を笑はせて居た。

其の月の末になると、富士岡から待ちに待つた祖母が、東京から歸へつた報知が届いて、僕は直ぐ其の翌日、來合せた伯父の知人に連れられて、富士岡へ歸つて行

つた。

中學は、九月八日から第二學期を開始する事となつて居たが、僕は又もや學資の出途に就いて考へねばならなくなつた。つくづく母の訓戒を身に泌めつゝも、母に詫状を出して、母から改めて新聞堂の奥様宛に、今一度置いてくれる様に頼んで貰つたけれど、其れに關しては何の返事も新聞堂から來ないらしかつた。「恩知らず」と罵られて迄も無理に暇取つた身の、僕からは勿論最早新聞堂へ頼みに行けなかつた。種々面倒を見て居た級監督谷先生に窮状を訴へて、援助を仰ぐと、直ぐに返事を下さつて——校長（河合氏）も非常に君の境遇に同情して居る。其れに一學期の成績も優良だし、兎に角一度出て來給へ。校長とも相談して何とかして上げられようと思ふから——と云つてくれた。僕は先生の手紙を祖母に見せて、

「兎に角静岡へ今一度云つて來ますから旅費を下さい」と、頼むと、

「伯父さんに相談してからにしないさい」との事で、伯父に相談すると、非常な反對

で、遂々静岡行は中止になつた。何故伯父は反對したか？ 何故に僕自身最善の途を盡して静岡行を執行し得なんだか？ 今に疑問で、日記には、静岡行を伯父に相談する前後、叔父に對する小さな不平がちよい／＼記されてある許りだ。

第一、新聞堂を出たる事。

第二、静岡行を執行せざりし事。

此の僕の苦學奮闘史上失敗の頁を残した二點が、遂に僕をして中學校卒業を二年後れしむる原因となつたのであつた。

さすらひの旅へ

十月になると中學校へ退學願を差出す。祖父からも、母からも切に奉公を勧め、自分の好きな職業の何にでも就けと云つて來た。僕は、「何故最初から東京へ行つて青年同志會へ入らなかつたらう？」一體伯父の云ふ事なんか肯いて、實家をあてに

して静岡中學校なんかへ入つたのが間違つて居る、奉公なんて眞平だ、如何しても東京へ出て苦學するんだ。東京へ！」と、斯う決心の臍を固めて更に出京の準備に取りかゝつた。祖母と母へ、東京へ行つて奉公でも何でもするから旅費を送つて下さいと言ひ遣ると、祖父から五圓、母から二圓、小園の祖父さんから一圓、合計八圓の小爲替のは入つた手紙が古行李の中へ入れられて、ゴロン／＼音を立て乍ら紀洲の山奥から届いた。

母の手紙には、『横濱根岸町に住む副島八郎どの同お杉どのへ宛、若し忝眞一參上致し候節は宜しく頼むと手紙を差出し置き候間、お前様からも頼み狀お出しなさるべく』云々、とあつたから、僕も副島の叔父と叔母へ、萬事依頼の手紙を出して置いた。

愈々十月十日、富士岡出發。故郷脱走當時の出京の目標である青年同志會へ入舍する爲に、鈴川驛から汽車に乗込んだのであつた。

新橋驛へ着いたのが午後の四時、直に同志會の在る神田三崎町へ俵を走らした。

初めて眺むる銀座街の賑はしさも、漂浪兒には何の感興も湧かなかつた。僕は俵に揺られ乍ら、一心に同志會が規則通りの完全な、苦學生養成所である事を念じて居た。聽て三崎町へ来て、車が三崎座（現神田劇場）の角を曲らうとした時に、車夫は、客待ちをして居る五六人の車夫に同志會の在所を訊ねた。

「青年同志會つて何處でせうかね」

「青年同志會？ それは直ぐ此横町だがね……」と、一人の親切さうな老車夫が立上つて指し乍ら、

「貴方が其處へ行くんですかい？」と車上の僕を見上げると斯う聞いた。

「え、さうです」

「行くのはお止しなさい。悪い事は云はねえからお中止なさい。行くと貴方の持つて居るその行李の物なんか皆な無くして了ひますよ」

僕は落膽した。しかし老車夫の言葉を有難いと思つた。

「如何しますかね」と、僕の乗つて居る車夫が、僕に次ぎの決断を促したので、兎に角近くの宿へ行かうと言つて、近所の山城屋旅館に投じたのであつた。其夜宿の人達に同志舎の内幕を聞くと、老車夫の云つた通りであつたが、猶僕は未練があつて、晩飯後、同志舎の前迄行つて見たが、これは又何といふ意外な事であつたらう。僕は、「英漢數教授青年同志舎」と書いた小さい看板を呆氣ちかげに取られ乍ら暫く見詰めてゐた。

翌朝最一度同志舎の近所に行つて、断念を確實にして、午後から新橋驛へ行つて、横濱に副島の義理ある叔父を訪ねべく、退京した。

其の日は雨降りで、しと／＼する五月雨が、僕の心を彌いが上にも陰鬱にした。根岸町の鐵砲場はにある叔父の家は直ぐに判つた。車夫が梶棒を下ろした時、子供を負ぶつて玄關に出て來た婦人を幌越に僕は認めて、餘りに母によく似て居るので、直

ぐに叔母である事を悟つた。前に手紙を出してもあつたし、叔母は喜んで僕を迎へてくれた。八つになる従妹の春子が、隅の方にチヨゴナンと坐つて眼をくり／＼させてゐた。

叔母は背から二つになる京子を下して乳を飲ませ乍ら、「あ、姉さんに遇ひ度い」と云つて、シミ／＼と母の事や父の病氣の模様などを聞いて居た。晩になると叔父が勤先の病院から歸つて來て、いろ／＼僕の前途の方針について、心配してくれたが、僕は四五日此家に遊んだ後、一旦富士岡へ引返し、更に出直す事にして此事を叔父に話すと、

「眞一決して心配するな、富士岡へ歸つて、祖母さんとも相談したりして愈々奉公する事に定つたら、又出ておいで、叔父さんが好い様にして上げるから」と、叔父の親切な言葉に、膝に手を置いて黙つて聞いて居た僕の眼には、感謝の涙が溢れて居た。

事志と齟齬して、悄悄乎として家郷を訪れた蘇秦張儀の事など考へ乍ら、再び富士岡へ歸た。そして愈々奉公と決心して、富士岡を後に又もや打直して横濱に向つて鈴川驛を東に去つたのは、其れから十日後であつた。

無論副島の叔父も叔母も心よく再び僕を迎へてくれた。僕は叔父の前に手を衝いて云つた。

「おちさん、僕は最う決心しましたから何卒何處かへ奉公に世話して下さい」

「あゝ、好いとも、外國商館に勤めて居る人にボーイの口を頼んで置いて上げよう、まあゆつくり遊んで居な」

其の翌日叔父は僕の退屈凌ぎに、何處からか實業之日本を五六冊借りて来て見せてくれた。

叔父の家に厄介になる様になつてから、早くも二月を霧消したのであつた。商館小僧の口は容易に發見ら無つたので、僕は毎日従妹の京子の守役をして居たが、晝

前になると京子を負ぶつて病院へ、叔父の辨當を運ぶのが僕の日課の一つであつた。

一 病院内の患者の運動場である芝生の横手を通つて、叔父の休憩室で暫く待つて居ると、聽て、叔父が黒い前掛を當て襷掛けで出て來て、

「御苦勞さん」と云ひ乍ら、先づ京子をあやしてから、麵麩切れと砂糖の入つた牛乳を僕に出して呉れた。

副島の義叔父は駿河の吉原町で、相當に手擴く藥種商を營んで居たのであるが、生來の俠氣が災して親戚や知人の爲に破産し、爲に店を壘んで横濱に出て、暫く隠忍自重して居るのであつた。僅な月給の不足勝な生活費は、夜の眼も眠らないで針を運ばず叔母が補つて居た。此様に窮迫した副島家へ僕が飛込んで行つて、二月も何もせずにはぶら／＼して遊んで居たけれど、叔母は勿論の事、叔父も決して僕に對して嫌な顔をしなかつた。従妹の春子も伶俐で温順しく、僕を「兄さん／＼」と云つて居た。この副島の叔父叔母達の僕に對する親切な態度は、子供とは云へ既に十

五歳の僕の頭の中に、感謝の念が強く深く刻み込まれたのであつた。

(叔父の家に厄介になつて京子を守し乍らも、生來の腕白は止まなかつたと見え、近所の子供達と喧嘩して泣かしたので尻を持ち込まれ、叔母から旅へ出て其様な事をする、皆に憎まれる様になると教訓された事が日記にある。)

ヨコハマ、インポート、エクスポートカンパニー
横濱輸出入商會

「眞一さんは居らつしやいますか？」

「はい……………」と云つた僕は玄關に出て見ると、格子外に師走の月も更けた寒空に身を縮め乍ら、藤田君のお母さんが立つて居た。

「小母さんまあお上りなさいせんか」

「は、有難う、けれど、さうしちやゐられませんの、今私ね、私の勤めて居る異人館で、山下町の三十六番地館でボーイの欠員があると聞きましたので、貴方に知ら

せて上げやうと思つて飛んで來ましたの、貴方、其處へいらつしやらない？」

「あ、さうですか其れはどうも……………」

「眞ちやんが行らつしやるなら連れて行つてあげませう」

僕は直ぐ着物を着替へて藤田君のお母さんに厚く禮を云ひ乍ら、其後に隨いて行つた。

代官阪を下つて元町から前田橋に出て、外人居留地に入ると直ぐ三十六番館に着いた。そこは横濱輸出入商會と云つて、本店を紐育に有し、日本貿易を營んで居る外人商館であつた。藤田君のお母さんは、僕を受付の者に頼んで呉れた後、忙しいからと云つて直ぐ勤務先の異人館に歸つて行かれた。僕は受付の人に連れられて、二十人許りの館員達が事務を執つて居る處を通つて、支配人ミユラー氏の室に入つた。

ミユラー氏は盛んにペンを走らして居たが、聽てペンを置いて吸取紙でプロット

すると、廻轉椅子を僕の方へ向けた。そして暫く僕の顔を視詰めて居たが、
「幾何？」と、頗る流暢な日本語で問うた。

「十五です」

「學校は？」

「高等小學校へ二年通つた後、中學校に半年程行つたきり中止しました」

「オーライ、明日から居らしやい」

ミュ氏は斯う云つて、手を伸ばして卓上鈴を押すとボーイが入つて來た。

「此のボーイ明日から來ます。貴方は、みなさんに紹介して上げるのです」と云つた。

ミュ氏は、更に僕の方へ向き直つて、

「委しい事は此ボーイに聞きなさい」

「はい。何卒宜しう御願ひ致します」

僕は件の給仕に伴られてミュ氏の室から出ると、館員達に挨拶して廻つた後、給仕室に退いて種々給仕頭から仕事の手順を聞いた。給仕頭は最初は誰も皆月給が五圓である事を物語つて居た。愈々僕は此處に境遇上止むを得ず年來の志望を一時放擲して、祖父及び母の意見に従つて、奉公する身となつたのであつた。

社會生活の第一試煉

僕は毎朝他の同僚達よりも成るべく早く出勤する事に心掛けて居た。給仕仲間の仕事としては、朝七時迄に出勤して、掃除したり暖爐を焚き附けたりして、八時過から出て來る館員達を待つて、それから使歩きに東奔西走するのであつた。

給仕は僕とも四人で、各々に番頭連から可い加減な綽名を附せられて居た。給仕頭は顔が腦病藥の商標である腦丸に似て居ると云つて「腦丸〜」と呼ばれた。僕が入社すると、松本と云ふ姓を持った給仕が二人出來たので二人松本は、「デカ松」

と「小松」とに區別せられた。無論僕が「小松」であつた。今一人は言語舉動が頗る悠長なので「ノッソリ」と代名せられて居た。

明治三十九年も此處に暮て、僕が故郷脱走以來の第一の旅の正月は兎も角も蓋無く横濱に迎ふる事となる。愈々十六歳だ。

給仕として商館通ひをして居る中に、辛いこと悲しい事がひつきりなしに、「是でも屁古垂れぬか！ 是でもか！」と、云つた風に、僕に打つつかて來た。番頭連は自分達が給仕時代の昔を忘れて、嫁虐りの姑の様に給仕達に辛く當つた。僕が社會的闘士としての洗練は、先づ此頃から本式に味ひ始めたと云つて可い。或時、僕とデカ松君と兩人で雜貨倉に入つて掃除して居ると、番頭のAが兩人の名を別々に呼立てたが、倉深く居つたので、聞え無かつたから返事を爲なんだ。すると、

「君達Aさんが呼んで居るよ」と云ひ乍らノッソリ君が、倉の中へ兩人を呼びに來た。兩人がAの處へ飛んで行くと、事務室の入口迄出て待つて居たAは、

「横着者！」と兩人を怒號したと思ふと、突然兩人を撲付け乍ら、床の上へ蹴倒したのであつた。腰を強く蹴られた兩人は、床の上で暫く得立ち上らずに半身を斜に起した儘、Aの顔を悲しげに見上げて居た。而もAの僕達を呼んだ用事は私の事であつた。給仕室に退いた兩人は手に手を取つて泣いた。デカ松君は十七で僕より年長であつたけれど、父母の膝下に温く暮す身の、立志故郷を脱走した僕よりも覺悟が弱かつた。デカ松君は兩手の甲で涙を拭つてすゝり泣き乍ら、

「小松君、同じ商館でも此様慘酷い事をする所つてありやしない……僕も最う今日限り退社する……生れてから未だ親にだつて蹴られた事の無い體だ。……君も退社し給へ、そして僕のお父さんに君を最つと可い處へ世話して貰つて上げよう」と、云つた。

「けれどもね、僕は君見たいにお父さんやお母さんの傍に居たら可いんだけど、……其れに又叔父さんや叔母さんに心配懸くるものね、艱難は汝を玉にするつて云

ふじや無いか。辛抱せうよ、ね、ね」僕も泣きじやくり乍らデカ松君の肩を揺ぶつて慰めて居た。

二三日するとうとうデカ松君は退社して仕舞つて、代りに本牧の小澤と云ふ牧師の悴が入つて來た。僕と同齡で、左の眼の上の眼瞼に腫物の痕があつて、早速番頭連は小澤君を「メツバ〜」と、呼び始めた。メツバ君は或時番頭の用事で買物に行つて來たが、其品がBの氣に入らなくなつて、メツバ君の使に行つた留守中にBは僕に其の品物を返して來いと云つた。僕が其商店へ行つて代金と交換えると數錢の不足があつて、僕は直ぐにメツバ君の棒先切りを悟つたが、兎も角も自分の小遣錢を立替えて、全部の金錢をBに渡して置いた。夕方、商館からの歸途にメツバ君が僕に、「あゝ悪い事は出來ないね、どうも濟まなかつた」と云つて僕の立替金を返して呉れたのであつた。

僕は「Chit Book」を持つて使に行く時には、一分でも早く歸つて皆なに賞めら

れようと思つて、途中を走つた位であつた。或時使先きの都合で歸館が非常に手間取つて、主人が待ち兼ねて居る所へ返書を持つて行くと、B番頭が傍に居て、

「此の給仕は使が遅くつていけない、途中遊んで歩くんです」と、主人に讒訴した。其時主人は知らぬ顔して居たけれど、僕は堪ら無い程世の中が恨めしくなつて、幾乎と口借涙を呑んだ事もあつた。

けれども決して世の中は、如何なる艱苦に遭遇するとも、悲觀落膽するべきで無い。隱忍自重すれば必ず光明の反面が廻り來るものだ。僕の誠意は、聽て猶太系である主人の胸中に感應したと見え、暫くすると月給も上げて呉れ、大金を持つて銀行通ひを許さるゝやうにもなつた。

次ぎに甚だ慚愧に堪えぬ事を二三告白して、當時に於ける商館員生活の一部を紹介する。

番頭Cが、水飴を舐つた後の空瓶を、綺麗に洗つて來いと云つて僕に差出した。

僕が食堂へ行つて、箸の先で瓶の内側を擦つて居ると、箸の先に拇指程の飴の團塊が出来た。僕は其れを黙つて口の中へ入れた。其れを主人の抱車夫が認めて、其翌日の晝餐時に館員が食堂へ皆集つた時、「小松は水飴の瓶の中へ舌を入れて舐つた」と、面白半分にならんと、何か事あれかしと侍構へて居た。Cは口を極めて衆人稠座の中で僕を嘲罵した。僕は心中深く悔いて眞赤になつて俯向いて居た。

商館が事務の都合で早く退けることがあると、番頭連が倉庫の陰に隠れて、盛んに「丁半」といふ博奕をやつた。僕等も面白いから其傍へ行つて立つて見て居るとC番頭が小用に立ち掛けて、僕に代つてやれと云つた。僕は他の同僚達と相談し合つて、C番頭の小用から戻る間だけ、一寸やつたのが原因で、其の中何時の間にか丁半やトランプを二錢三錢の金を掛けて争ふ様になり、遂には月給半分程負けて了つた事もあつた。

Kと云ふ倉番の赤ん坊が亡くなつて、僕は葬禮の日に叔母から二十錢の香奠を貰

つて持つて行つたら、歸途に大きな饅頭を二つ呉れた。其れを持つてまだ日足が早かつたので、同僚メツバやノツソリ君と海岸通りを散歩して居ると、二君はムシャムシャと件の饅頭を食つて了つた。僕もとう／＼一つ食べて、残り一つ持つて歸つたが、「僕が一つ喰べました」と云へ無くて、黙つて一つは入つた紙包みを叔母に渡すと叔母も黙つて受取つた。僕は今に此事を思ひ出すと、誤つた家庭教育が齎らした性癖が、盡未來左巻に捲く朝顔の蔓の様に、結執して居たのを思つて涙ぐまれて来る。

明治四十年七月の中洗、二年振りで故郷の父の手紙に接した。

父の手紙に依ると、田中病院に移つて凡ゆる療治方法を講じたけれど、半身の不随は最早全治せぬらしい。それで十日許前に歸宅して兎も角も家で療治する事に決定した。不随は不随でも其他には身體に異状が無いから心配するな、來月から東京國民中學會の講義録がお前の許へ届くから勉強せよ、猶小爲替で二圓送つたから好

いた事に使へ——と云ふ様な事が書いてあつた。

此の父の手紙に接する迄、僕は子供心にも父に對して一種の怨恨を持つて居た。母は總ては運命だから決して父上を恨むやうな事を云つてはならぬと、訓戒して呉れて居たけれど、僕の在郷當時に、若い叔母達が父の行動を批難して、其れが鋭く僕の頭に印象して居た爲に、何かに附けて一父さへ眞面目な生活をして居て呉れたら……』と父を怨んだのであつた。父の手紙を読んで居ると、文面の何處かに胃す事の出来ぬ絶對的な骨肉の愛情が漂つてゐて、其れが僕の神経を通じて胸に泌み込んで來ると、堪らなく父に遇ひ度くなつた。

九月の末になると紐育の本店から、ソロモンと云ふ人が事業視察に渡來して、五六日此の商會で事務を執つて居た。或日の事恰度出帆前いけがで館員達は大變忙がしかつた。人夫が盛んに出入して輸出の雜貨品を荷造りしたり、それをトロッコで運搬したりして居た。タイピストのアリス嬢は汗塗あせれになつて鍵盤かんばんを押し、僕等は「ッピ—

したり、汽船會社に送り状を持つて行つたりして手古舞つて居た。其晩は夜業で八時頃迄事務を執つて居た。間も無く館員が退出したので僕達は机の上を整理して、給仕室に一服して居るとソロモン氏が給仕室へ入つて來た。給仕頭の腦丸君は日誌を附けて居るし、僕は机に凭たれて其傍に立つて居た。

「貴方幾歳？」あなたソロモン氏は僕に話し掛けた。

「十六です」と、答へると今度は英語イングリッシュで、

「Yes……straight!」と來た。僕はソ氏が何か外の用事で給仕室に入つて來たのだと思つたから、うつかりして机に凭れた儘、ソ氏との conversation に入つたのであつた。注意せられてはッ！と氣が着いて直立した。

「疲れましたが？」日本に長く居た事があるので日語は流暢だ。

「え……」僕は斯う答へるより外無かつた。

「何でも辛抱なさるよろしい Can you understand?」

「有り難う御座います」僕は感激し乍ら云つた。其翌日ソ氏神戸の支店へ向け退濱した。

無言の訣別

明治四十年の十一月初旬であつた。給仕達の分擔事務の一として、横濱郵便局外國課の私書函を開けに行つたメツバ君が、歸つて來て、僕の机の上に一枚の葉書を置いた。

明日夕方迄來船を待つ

委細は面談の上申上候

十一月六日 夕

港内碇泊 日本丸にて

文 雄

「呀つ！ 叔父さんが！……………」

僕は葉書を手にした儘暫く呆然として居た。昨年の暮僕が横濱へ漂浪して來た時、祖父や母から手紙が來て、父の末弟である文雄叔父が、其の年の春の中學卒業試験に運悪く失敗して、後一年間の學資が保障せられないので、中學を退いて家運挽回の爲に渡米する事になつた、と知らして來た事があつたが、其後叔父の渡米に就いて故郷から何の頼りにも接しないので、最う中止したんだらうと思つて居ると、突然に此の葉書を手にしたのであつた。

翌日の午後三時頃に、主人から暇を貰ふと大急ぎで、港内の棧橋に横づけせられて居る日本丸に、叔父を訪ねて行つた。どうせ働きに行くんだから、一等や二等に居りつこは無いと思つたから、棧橋から梯子を傳はつて甲板に上つて、直ぐ船員に三等船室の所在を聞いた。教へられた通りに機關室の後部を廻つて、船艙に降りて行くと、其所には五六十人程の人が、芝居の櫛の様に仕切られた、疊一疊敷程の廣

さを公平に分配せられて、其の中で寝轉ろんだり坐つたりして居た。夫婦で出稼ぎをするのだらう、中には胸をありつたけ擴げて子供に乳を哺まして居る百姓の女房さんの様な婦人も居た。僕は雜然とした中に叔父を見出す事に可なり骨折れたが、入口から向つて右の隅の方に、木綿の紋付を着て、枡の中に坐つて雑誌を讀んで居る叔父を認めて、小走りに走り寄り乍ら、

「叔父さん……」と呼びかけた。

「お、真一か……」

僕は何とも云へぬ悲しみが胸から込み上げて來ると次の言葉に詰つて、暫く黙つた儘叔父の顔を見詰めて居た。

「何時此地へ來たので？」

「昨日、神戸から此汽船で來たんや」

「實家でも皆達者かい？」

「うん、變りない」

「お父さんの病氣は最うあの儘かい、そいで最う何うしても足ん立つ事が出來んのかい？」

「兄さんの病氣は最う致方が無いさうや。けれどまだ足ん立てないだけで生命には別狀無いんやさかいなあ、まあ不幸中の幸や」

叔父は信玄袋の中から罐を取出して、蓋を開けると玉蜀黍や腕豆やあられの一緒に煎つたのを僕に食へと云つて出した。家郷に居つた時に竈でよく祖母が煎つて呉れて、僕等兄弟の者が其れを等分に配けて貰ふと、紙に包んで懐に入れ仲よく遊びに行つた幼な頃を思ひ浮べて、故郷が懐かしかつた。

叔父と僕の會話が周圍の人の視聽を惹いたと見えて、

「此のお兒さんは貴方の御親戚の方でもありますか？」と誰か叔父に訊いた
「僕の甥なのです」

「左様ですか、随分遠方に来て居られるんですね」

叔父は、僕が十五の時出郷して今は横濱の外國商館へ通つて居る事など、附加して説明して居た、僕は黙つてムシヤク豆を食つて居た。

「眞一、上陸へ行かう。お前に食麵麩を買つて来て貰はんならん」

「呔」と點頭いた僕は、両手に一つばい豆を掴んで叔父の後から跟いて行つた。

二人は棧橋を渡つて海岸通りに出ると、グラランド・ホテルの前に据えてあつたベンチに腰を掛けた。そして僕は山下町の麵麩屋へ走つて行つて、叔父が航海中船の中で食ふと云ふ麵麩を十斤程買つて來た。

「眞一よ、お前に小遣錢を與りたいんじやけどな、お金は皆船長に預けて居るんや、そいで此處に是丈あるさかい、これでも與らう」

叔父は袂から廿五仙の銀貨を二枚出して僕に呉れた。

「おはれこ」

「まあお前も他郷へ來て随分辛い事有るやろけれど辛抱しな、叔父さんがなあ米國行つて儲けたら、彼地からお前の學資を送つてやるさかい辛抱しな」

僕は黙つて頭を下げた。

最う全然日は西に傾いて、濃い夕靄が海面いつばいに這うた其の中を、鷗が二羽白く浮んで居た。棧橋には出帆間際の汽船だる二三隻横づけになつて居た。

僕も黙つて居る、叔父も黙つて居る、黙つて二人は蒼黒い海面を見詰めて居た。居留地の夜分は寂寞としたものである。わけても海岸通りは淋しい。ホテルの泊り客でもあらう。時々僕等の腰掛けて居るベンチの後に二頭立の馬車を走らせた。叔父は其度毎に振返つて過ぎ行く馬車を見送つて居た。何時の間にか叔父の眼にも僕の眼にも涙が流れてゐた。一時間程二人は黙つて海面を見詰め乍ら泣いて居たが叔父は、「最う汽船へ歸らなくちやいけない」と、云つて立上つた。

「眞一、達者でなあ……時節を待つんやど………悪い事するなよ………副島さんの

皆さんに最う遇へんさかい、お前から宜しう云うて呉れ……………」
「……………」僕は點頭いた。

叔父は、僕が汽船まで送つて行かうと云ふのを無理に止めて一人て悄然と、淡い街燈の光に脊を照され乍ら、歸つて行つた。僕は後から思ひついた様に、

「叔父さんも達者でなあ……………」と、聲を掛け乍ら、叔父が水上警察署の陰に消ゆる迄見送つて居た。目に一杯の泪を湛えて……………」。

東 京 へ

横濱埠頭叔父と泪の訣別をしてから間も無く僕は、同郷の先輩で現八幡製鐵所奉職法學士、當時法科大學生であつた武川英三氏に長文の一書を呈して、出京苦學するについての一臂の勞を仰いだ。すると武川氏は、必ず貴殿の志を遂ぐるに就いて誠實に盡力するから暫時時期を見て貰ひ度いと云ふ返事を呉れた。

夫れから僕は又上京熱が熾んになつて、會社が嫌やになつた。しかし會社を出るについては、叔父達にも濟まぬ様な氣がして怏々として居た。今迄の晴やかな希望に満ちた態度は無く、寒い夕空に、縁側に停んで沈思する陰鬱な態度が幾日も續く様になつた。優しい叔母には無論僕の胸中が判りつこは無い。叔母は心配し初めたらしかつた。或夜十一時過だつたらう。不圖眼が覺むると叔母が大澤の伯母と火鉢を中に圍んで、心配さうに僕の事について話をして居た。

「……………で、眞一は一體何うせうと云んだらうね」と叔母が云つた。

「彼の子だつて、立身せうと思つて家郷を飛出してくる位だもの性根は有らあね」と、大澤の伯母が云つた。

「僕は其後も、武川氏が——隱忍自重以て時機を俟て——を繰返へされたにも拘らず、單獨上京を決意した。そして、改めて郷里の祖父と母へ手紙を出して、

「貴方達から何と云はれても最つと學問を仕度いから上京する。今度こそは假令本

を飲み土を嚙つても、年來の抱負を實現する爲に身命を賭する決心だから、此度の上京は是非許して欲しい。其れから私の退社して東京へ行くに就いて、副島の義叔父にも相談の手紙を出して戴き度い』と云ひ送つた。すると今度は『好きな様にするがい』と云ふ少々捨鉢な許諾の手紙が母から届いた。

商館生活をし乍ら明治四十一年の正月を再び横濱に迎えた僕は、愈々一月末日に善かれ悪しかれ多端であつた商館生活を辭して、二月二日に東京に向けて横濱を去つた。

溶かされたる鐵塊

〔中學時代〕